山形県埋蔵文化財センター調査報告書第74集

四ツ塚遺跡

第2次発掘調査報告書

2000

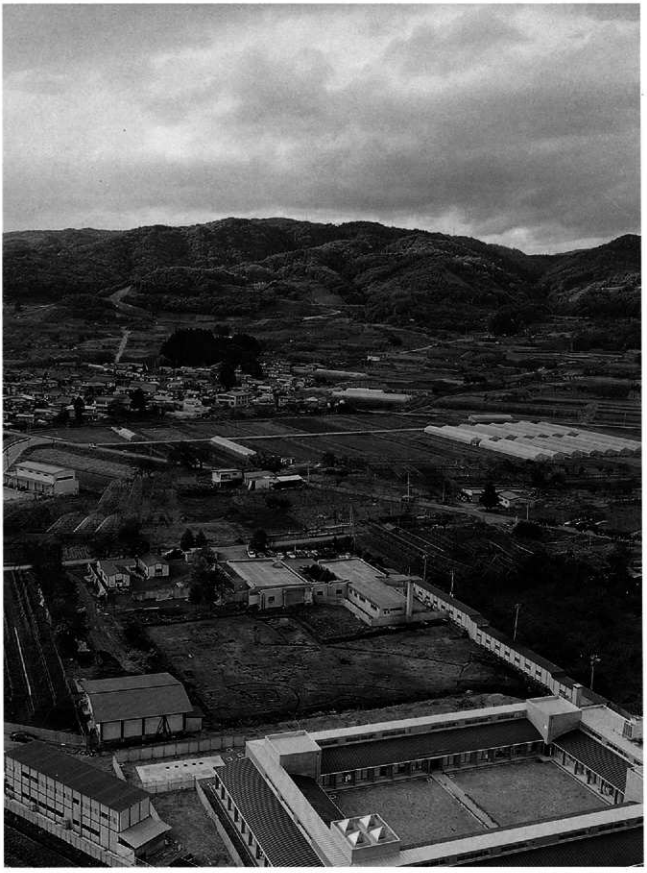
財団法人　山形県埋蔵文化財センター

四ツ塚遺跡

第2次発掘調査報告書

平成12年3月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター



調査区全景（東上空から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、四ツ塚遺跡の調査成果をまとめたものです。

四ツ塚遺跡は、山形盆地の北西部に位置する西村山郡河北町に所在します。葉山の南東に広がるこの町は、最上川や寒河江川の扇状地で、米とサクランボの栽培が盛んです。また江戸時代以前からの最上川の紅花交易によって、京文化の影響を色濃く残す町でもあります。

この度、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に伴い、工事に先立って四ツ塚遺跡の第2次発掘調査を実施しました。

調査では、古代の掘立柱建物跡とその周囲を廻る溝跡が検出されたほか、中世の掘立柱建物跡と区画溝跡、道路状遺構も1次調査で見つかった延長部分が確認されました。遺物は古代の竪穴住居跡からまとまって出土しました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成12年3月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　場　清　耕

例　言

1　本書は、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に係る「四ツ塚遺跡」の第２次発掘調査報告書である。

2　調査は山形県健康福祉部障害福祉課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺　跡　名	四ツ塚遺跡　　遺跡番号　481	
所　在　地	山形県西村山郡河北町大字吉田字馬場164他	
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター	
受 託 期 間	平成11年４月１日～平成12年３月31日	
現 地 調 査	平成11年８月30日～平成11年11月５日	
調査担当者	調査第一課長	野尻　侃
	調査第四課長	名和　達朗
	調査研究員	岡部　博（調査主任）
	調　査　員	豊野　潤子

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県健康福祉部障害福祉課、河北町教育委員会、西村山教育事務所、山形県立救護施設みやま荘等関係機関にご協力いただいた。

5　本書の作成・執筆は、岡部　博、豊野潤子が担当した。編集は須賀井新人、多田和弘、大村和弘が担当し、全体については野尻　侃が監修した。

6　委託業務は下記のとおりである。

遺構写真実測　　株式会社日本テクニカルセンター

7　出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＴ…竪穴住居跡　　ＳＢ…掘立柱建物跡　　ＳＫ…土壙

ＳＤ…溝跡　　ＳＥ…井戸跡　　ＳＰ…ピット

ＥＢ…掘立柱建物跡の柱穴　　ＳＸ…性格不明遺構

ＲＰ…登録土器

2　遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書の番号として踏襲した。

3　報告書執筆の基準は下記のとおりである。

（1）　調査概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

（2）　グリッドの南北軸（Ｙ軸）はＮ－1°－Ｅを測る。

（3）　遺構実測図は１/10～１/1000の縮図で採録し、各々スケールを付した。

（4）　土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土については算用数字を付して区別した。

（5）　遺構実測図中の遺物実測図は、原則として1/8で採録したが、それ以外の縮図のものについては図中に記した。礫は網目スクリーントーンで表した。それ以外のスクリーントーンについては、各挿図に凡例を示した。

（6）　本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。

（7）　遺物実測図・拓影図・遺物図版は1/3で採録し、各挿図にスケールを付した。

（8）　遺物実測図中の土器について、土師器は断面白抜き、須恵器は断面黒ベタ、黒色処理は黒網目スクリーントーンで表示した。

（9）　遺物観察表中において、(　) 内数値は図上復元による推計値を示している。

（10）　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に拠った。

目　次

Ⅰ　調査の経緯
1　調査に至る経過……1
2　調査の経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境
1　地理的環境……2
2　歴史的環境……2
Ⅲ　遺跡の概観
1　調査区と基本層序……8
2　遺構と遺物の分布……8
Ⅳ　検出された遺構
1　竪穴住居跡……9
2　掘立柱建物跡……12
3　ＳＢ４掘立柱建物跡とその周辺遺構　16
4　溝跡・道路状遺構……20
5　土壙……25
6　井戸跡……27
Ⅴ　出土した遺物
1　土師器……28
2　須恵器……28
3　ＳＴ365出土土器……29
4　ＳＴ652出土土器……29
5　ＳＢ４関連遺構出土土器……29
6　ＳＤ123出土土器……30
7　道路溝出土土器……30
8　ＳＫ580出土土器……30
9　ＳＫ729出土土器……30
10　その他の出土土器……30
Ⅵ　まとめ……39
参考文献……40

報告書抄録……41

付図　四ツ塚遺跡遺構配置図（第１次・第２次）

表

表１　遺物観察表（１）……37
表２　遺物観察表（２）……38

挿　図

第１図　遺跡位置図……3
第２図　調査区概要図……4
第３図　遺構配置図……5
第４図　基本層序……7
第５図　ＳＴ365竪穴住居跡……10
第６図　ＳＴ652竪穴住居跡……11
第７図　ＳＢ３掘立柱建物跡……13
第８図　ＳＢ２掘立柱建物跡……15
第９図　ＳＢ４掘立柱建物跡と
　　その周辺遺構……17
第10図　ＳＤ998・959他溝跡……22
第11図　ＳＤ123・362他溝跡……23
第12図　道路状遺構……24
第13図　ＳＫ523・548他土壙……26
第14図　ＳＥ276井戸跡……27
第15図　遺物実測図（１）……31
第16図　遺物実測図（２）……32
第17図　遺物実測図（３）……33
第18図　遺物実測図（４）……34
第19図　遺物実測図（５）……35
第20図　遺物実測図（６）……36

図　版

巻頭図版　調査区全景
図版１　第１次・第２次合成空中写真
図版２　調査状況・基本層序他
図版３　ＳＴ365竪穴住居跡
図版４　ＳＴ652竪穴住居跡
図版５　ＳＢ３掘立柱建物跡
図版６　ＳＢ２掘立柱建物跡
図版７　ＳＢ４掘立柱建物跡
図版８　ＳＢ４周辺溝跡土層断面他
図版９　溝跡土層断面
図版10　道路状遺構・溝跡土層断面
図版11　土壙・井戸跡土層断面他
図版12　出土遺物（１）
図版13　出土遺物（２）
図版14　出土遺物（３）
図版15　出土遺物（４）
図版16　出土遺物（５）

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

今回の調査は、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に伴う第２次調査である。

第１次調査は、今年度調査区域の東側にあたる現在のみやま荘新居住棟部分（約3,900㎡）について、平成10年５月11日から７月８日まで行われた。

今年度の事業予定地について、山形県教育庁文化財課が隣接する部分も含めて、平成10年11月と12月に試掘調査を実施し、７カ所の試掘トレンチから溝跡・溝状遺構・土壙・柱穴等の遺構と須恵器甕体部の遺物を検出した。試掘調査結果及び第１次調査の状況を基に、関係機関による協議が行われた結果、平成11年度みやま荘改築整備予定地部分についても緊急発掘調査を実施することとなった。当初の調査面積は1,700㎡、調査期間は８月30日から10月22日である。発掘調査に至るまでの協議等は以下の通りである。

	（第１次調査）	（第２次調査）
◆県教育庁文化財課・県埋蔵文化財センターとで、埋蔵文化財発掘調査計画について協議	（H 10/1/23）	（H 11/1/27）
◆県健康福祉部長より県埋蔵文化財センター理事長あてに、「県救護施設みやま荘改築整備事業実施に伴う地区内の埋蔵文化財調査」の依頼	（H 10/3/12）	（H 11/3/17）
◆県健康福祉部長と県埋蔵文化財センターとで「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結	（H 10/4/1）	（H 11/4/1）

2　調査の経過

平成11年８月20日、河北町教育委員会において、四ツ塚遺跡に係る遺跡発掘調査の打ち合わせ会を開催し、発掘調査に至る経過報告・調査期間・調査体制・調査の方法・安全対策等が確認された。以下に大まかな作業工程を列記する。

重機による表土除去は、８月26日から９月16日まで15日間行った。８月30日に調査事務所を設置し、業務の安全を確認し合い、現地調査を開始した。

重機による表土除去と並行して面整理を行った。さらに、グリッド設定・遺構検出・遺構プランのマーキングなどの作業が行われた。調査区の位置・内部の区画などを示すグリッドは、５ｍ×５ｍの大きさで、Ｘ軸は西から東にＡ～Ｋ、Ｙ軸は北から南に１～22として座標を設定し、「Ａ－１」グリッドというように位置を標記した。

なお、事業計画の変更により調査面積が当初から3,600㎡に増え、遺構数が当初見込みよりも増加することが判明したため、平成11年10月７日に協議を行った結果調査終了日を11月５日までに延長することとなった。その後、遺構検出、遺構精査を繰り返しながら、断面図・平面図等の作成、そして写真撮影を並行して行いながら記録作業を進めた。11月４日には調査の成果を公表する調査説明会を開催し、近接する北谷地小学校第６学年児童を含め約70名の参加を得た。また、11月２日にはラジコンヘリによる空中撮影を行っている。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

四ツ塚遺跡の所在している河北町は、山形県の中央山形盆地の北西部に位置し、東は天童市・東根市、北は村山市、西と南は寒河江市に接している。中心の谷地は近世初期までの城下町で、奥羽本線開通までは最上川の河港として栄え、紅花の集散地であった。谷地の八幡神社の舞楽は天平以来のものといわれ、県の無形文化財に指定されている。

この地区の北西部に葉山火山がある。この葉山の東南方を流下する水系には、千座川、法師川、滝の沢川、古沢川などがあり、その中の法師川・滝の沢川は、ともに河北町の耕地を潤している。河北町内で出羽丘陵葉山山塊の南東斜面が、南部のおよそ100mから北へ120m～130mの等高線を形成し、山地と平野部を区分する。寒河江川が町の南縁を区切って北から東に流れ、最上川はその東縁を区切って南から北に流れている。町域の70%を占める東部の平野部は、大半が寒河江川の開析扇状地で、北東部の平野部には最上川の自然堤防や氾濫原が広がる。また、葉山山塊から平野部に南東流する滝ノ沢川が下沢畑から高島地区まで扇状地をつくり、なお北部の山麓線と100mの等高線に挟まれた傾斜地域は、同じく南東流する法師川が扇状地をなしたもので、沢畑以北の集落はその扇端部に立地する。四ツ塚遺跡は、法師川扇状地内にあり、その川の右岸にあって山麓寄りに位置し、標高は約100mで南東方に向かって緩やかに傾斜している。この地区の地質分布は、平野部を見るに、礫・砂・粘土などが層をなし肥沃な耕地となっている。これら沖積世の土層は湖成層であって、地下には泥炭層を伴う場合が多い。

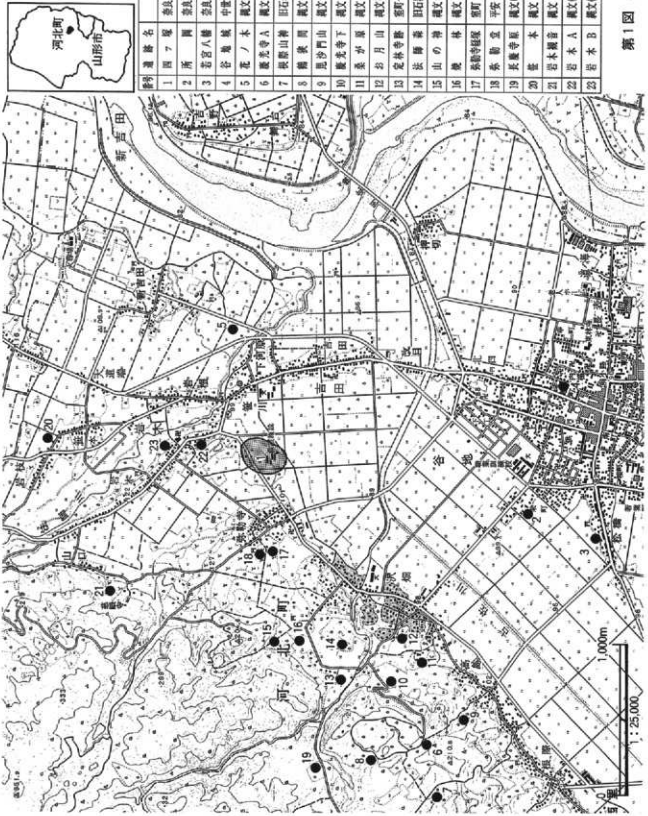
2　歴史的環境

旧石器時代のものとしては、法師森・奥土入・模際山神などの遺跡がある。縄文時代の遺跡は、前期は後沢・長慶寺原・奥土入、中期はお月山・慶光寺山A・権現森など、後期は奥土入・長慶寺原、晩期は花ノ木など多くの遺跡があり、いずれも集落跡で、そのほとんどが東部の平野部に臨む丘陵と山麓に分布する。また、それらは中小河川の河岸段丘に位置するところである。

弥生時代の遺物としては、縄文中・晩期からの遺物も発見され、現在も発掘調査が進められている花ノ木遺跡からは石刀・石庖丁・偏平片刃石斧などが出土している。

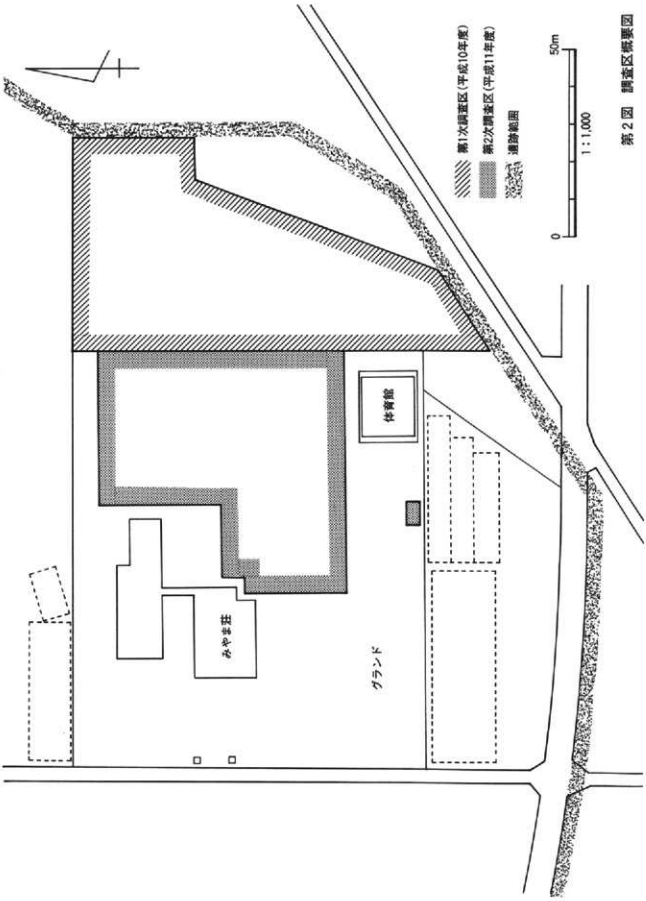
古墳時代以降の遺跡のほとんどが、平野部に広がる。遺跡の層は全町的にきわめて厚いといえる。その古墳時代の遺跡は、西里・下槙・桑ガ原などがあり、奈良時代の集落跡がお月山・畑中(一の坪)・不動木、平安時代のものが溝延馬場・月山堂などから発見されている。古墳時代前期から平安時代後期まで継続して営まれた熊野台遺跡もある。熊野台遺跡からは「大刀自」の篦書きのある甕の一部が見つかっている。律令制下では出羽国村山郡に属した。畑中遺跡から「大山郷」と墨書した須恵器坏が出土し、大山郷の所在に迫るものとして問題解決の逆鉾を向けている。また、谷地・溝延の水田面には、広範な条里遺構の分布が確認される。

また、この河北町を含む西村山郡において、奈良時代まで溯る平野山古窯跡が、寒河江市平野山窯跡群である。河北町に隣接する寒河江市の西部丘陵に位置する平野山には、14の窯跡や須恵器ないし瓦の散布地が確認されている。

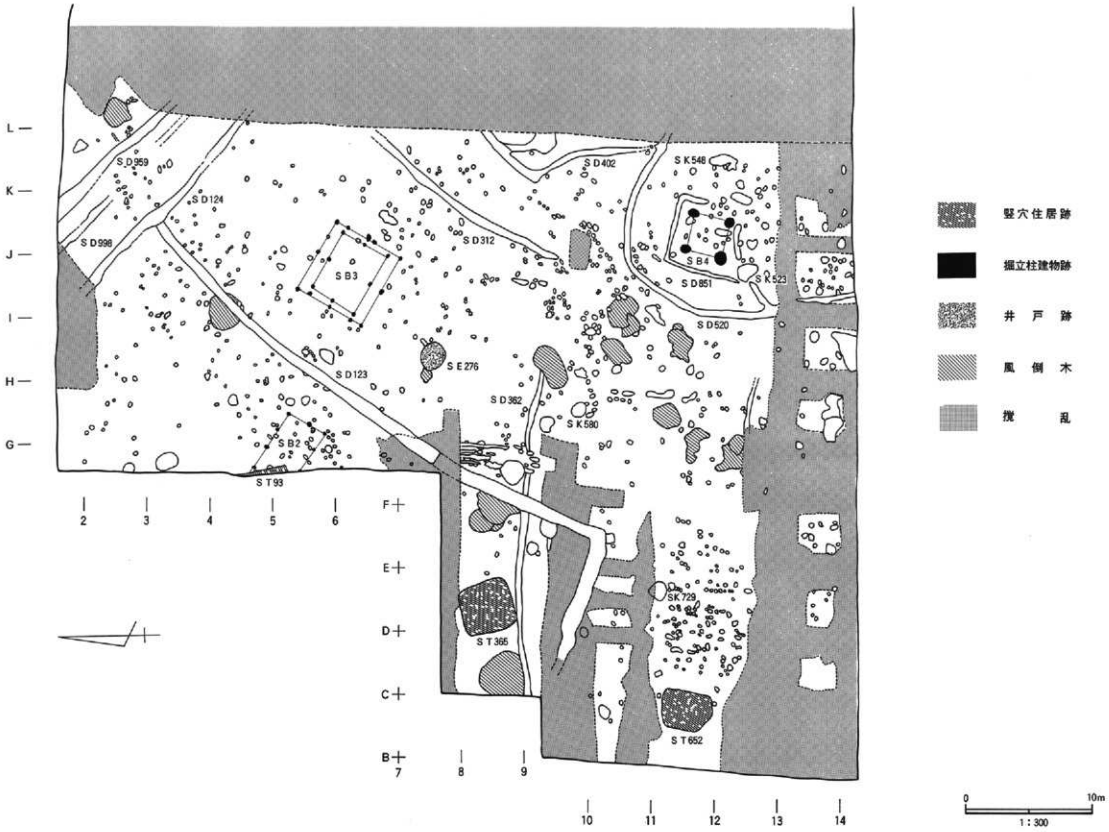


番号	遺跡名	時代
1	四ノ堀	弥生・平安・中世
2	酒井	弥生・平安
3	若宮八幡	弥生・平安
4	谷地城	中世
5	荒ノ木	縄文・弥生・弥生・平安
6	鷹巣堂入	縄文(前・中期)
7	根際山神	旧石器・縄文
8	鶴沢川	縄文(中期)
9	馬場門山	縄文・平安
10	鷹巣寺下	縄文
11	桑ヶ原	縄文(中期)・古墳
12	お月山	縄文(中期)・弥生
13	鷹巣寺跡	鎌倉～江戸
14	法師堂	旧石器・弥生
15	山の神	縄文
16	地蔵	縄文
17	弥勒寺観音	鎌倉
18	弥勒金	平安
19	長鷹寺原	縄文(前期)
20	藤本	縄文
21	岩崎前	縄文
22	岩本A	縄文(中期)
23	岩本B	縄文(前・中期)

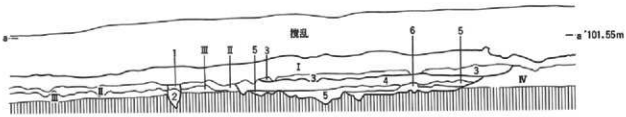
第1図　遺跡位置図



第2図　調査区概要図


竪穴住居跡
掘立柱建物跡
井戸跡
風倒木
撹乱
SD959
SD124
SD998
SB3
SD312
SD402
SK548
SB4
SD851
SK523
SD520
SE276
SD123
SD362
SK580
SB2
ST93
SK729
ST365
ST652
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
0
10m
1:300

第3図　遺構配置図

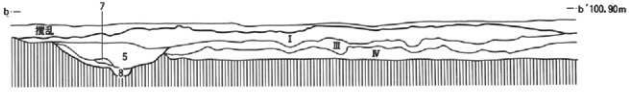


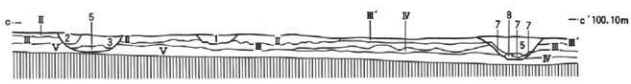
基本層序(a－a')
Ⅰ 10 YR 3/3 暗褐色シルト
Ⅱ 10 YR 2/2 黒褐色砂質シルト
Ⅲ 10 YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
Ⅳ 10 YR 4/4 褐色砂質シルト (全体に2～5cm大の礫を多量に含む)

E B89(S B2)
1 10 YR 3/2 黒褐色シルト (10 YR 5/4 にぶい黄褐色砂質シルトが4～5cm大のブロックで混入)
2 10 YR 2/2 黒褐色シルト (10 YR に ぶい黄褐色砂質シルトが1cm大のブロックでまだら状に混入)＝SB2の覆土2

S T92(断面確認のみ)
3 10 YR 3/1 黒褐色シルト

S T93(断面確認のみ)
4 10 YR 3/2 黒褐色シルト
5 10 YR 3/2 黒褐色シルト (10 YR 5/3 にぶい黄褐色砂質シルトがまだら状に混入)
6 10 YR 3/2 黒褐色シルト (10 YR 5/3 にぶい黄褐色砂質シルトが5 よりも多量に混入)

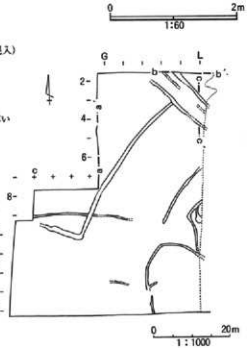




基本層序(b－b'、c－c')
Ⅰ 10 YR 2/2 黒褐色シルト
Ⅱ 10 YR 3/1 黒褐色シルト
Ⅲ' 10 YR 4/3 にぶい黄褐色シルト (10 YR 3/1 黒褐色シルトがまだら状に混入)
Ⅲ 10 YR 4/3 にぶい黄褐色シルト
Ⅳ 10 YR 3/3 暗褐色粗砂
Ⅴ 7.5 YR 3/2 黒褐色シルト

S D998
1 10 YR 3/2 黒褐色シルト (5mm大の風化礫が全体に混入、10 YR 4/3 にぶい黄褐色シルト質砂が一部分に混入)

S D959・S D124
2 10 YR 2/1 黒色シルト
3 7.5 YR 3/1 黒褐色シルト
5 7.5 YR 2/1 黒色シルト
7 7.5 YR 2/1 黒色シルト (7.5 YR 3/2 黒褐色シルトとⅣが少量混入)
8 7.5 YR 2/1 黒色シルト (7.5 YR 3/2 黒褐色シルトがまだら状に混入)



第4図 基本層序

Ⅲ　遺跡の概観

1　調査区と基本層序

四ツ塚遺跡の第１次・２次調査の調査区は、遺跡範囲の東南部分に位置する。出羽丘陵の縁辺部にあたり、法師川扇状地の西辺と接し、西から南東に向け緩やかに傾斜している。遺跡範囲の大半は、サクランボなどの果樹園や畑地として利用されるが、南東部は水田となっている。水田部分は、過去の開田及び圃場整備により削平を受けている。今年度の調査区は、救護施設みやま荘の居住棟や畑などの施設内にある。

基本層序は第４図に示す。調査区Ｆ－４～６グリッド西壁とＪ～Ｌ－１グリッド北壁また、Ｌ－３～５の東断面の３カ所で行っている。ａ－ａ′・ｂ－ｂ′の第Ⅰの層の上の攪乱部分は建物の盛土や耕作土または建物建設による攪乱部である。ａ－ａ′西側部分において第Ⅲ・Ⅳ層上面が遺構検出面となっている。ｂ－ｂ′第Ⅳ層は、調査区を覆っている柔らかい黒褐色シルトである。

2　遺構と遺物の分布

遺構は、調査区ほぼ全体に分布する。今年度の２次発掘調査では、全体で約1,000基の遺構数を確認している。主な遺構は、竪穴住居跡が４棟・掘立柱建物跡３棟・井戸跡１基で、溝は長短合わせ10条を越える。さらに、大小の土壙・ピット・風倒木等を加える。これらの遺構は時期的に奈良時代～中世にまたがる。また、昨年度の発掘調査で確認された道路跡遺構が今年度の調査でも調査区北東隅に確認された他、溝跡の延長の可能性が有るものが何条か検出されている。

昨年度の調査区と今年度の調査区の接点である東側の部分は、改築整備事業またはそれ以前に削平され、昨年度の調査区と今年度の調査区とは河川状の削平部を隔てて繋がることになった（第21図）。昨年度の調査区西側に検出された掘立柱建物跡の主柱穴は、その削平部分にあたり確認できなかった。また調査区内においても、解体された建物の基礎部分が遺構検出面下まで入る部分があった。特に調査区南側の部分については、建物の壁部分の基礎が深く入り込んで、遺構が隔絶する部分があり、遺構の構成が把握できない部分があった。

竪穴住居跡は、調査区の西側部にあたるやや高いところで検出された。この竪穴住居跡の周りは、遺構・柱穴も少なく、建物を構成することはできなかった。また、他遺構との重複もない。Ｆ－４・５グリッドの西壁部分において、重なった竪穴住居跡の東端部分が検出されているが、全容・時代等は不明である。

全体の遺構数の密度は、昨年度の調査区の密度に対して小さく、遺構数(基)／調査面積(㎡)の割合で比べると昨年度2,000／3900＝0.51に対して、今年度は1,000／3,600＝0.28である。さらに、調査区の西側にいくにしたがって、遺構は希薄となる。

遺物は調査区全域で出土するが、整理箱10箱と極めて少ない。竪穴住居跡やＳＢ４の周辺遺構また、土壙・溝・井戸遺構部分から出土した遺物を除くと、表土上やピット内・風倒木内等覆土内の遺物出土は稀である。遺物構成では、須恵器に比して土師器の割合が高い。

Ⅳ　検出された遺構

1　竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区の西側に２棟、Ｆ－４・５グリッドの西壁際に重複した竪穴住居跡の東隅部分２棟が検出され、総計４棟を数える。ここでは、平面形全容が検出されたＳＴ365とＳＴ652について記述していく。ＳＴ365はＳＴ652の北東18m程の所に位置しているが、出土土器の様相から同時代の所産ではなく、ＳＴ365の方がＳＴ652よりも時代を溯ると考える。

ＳＴ365(第５図・図版４)

調査区西側のＤ－７～９グリッドにおいて検出された。ＳＤ312と隣接しているが、重複しておらず、新旧関係は不明である。平面形は、南北にやや長軸方向をとり4.1m、東西方向に短軸をとり3.7mを測る隅丸方形の竪穴住居跡である。主軸方位はＮ－14°－Ｗである。床面は概ね平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは北壁で18～26cm、東壁は８～21cm、南壁６～11cm、西壁15～21cmを測る。壁溝は検出されなかった。柱穴も検出されず、南西の隅に長軸80cm、短軸40cmを測る不整形の落ち込みがあるが、他の３コーナーには検出されておらず、隅柱穴とは考えにくい。炉跡・カマドとも検出されなかった。覆土は３層に分層され、黒褐色シルトを基調とする。１層と３層の間に暗褐色シルトがレンズ状に堆積している。これらの土層は、自然堆積と考えられる。

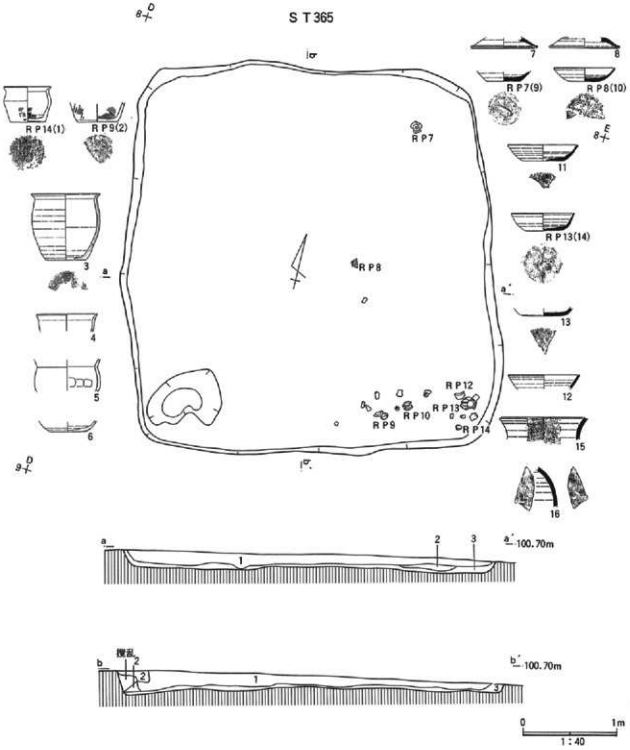
出土遺物は第15図参照。図示したものは16点である。土師器の甕(１～６)、須恵器の蓋(７・８)、坏(９～14)、甕(15)、壺(16)がある。須恵器の坏の底部切り離しはヘラ切りや回転ヘラ切りによるものが多く、土師器の甕は非ロクロ成形で、底部に木葉痕や粘土紐積上げ痕のあるものがある。

本住居の時期は、出土した土器の観察結果に基づいて、奈良時代の後半と考える。

ＳＴ652(第６図・図版５)

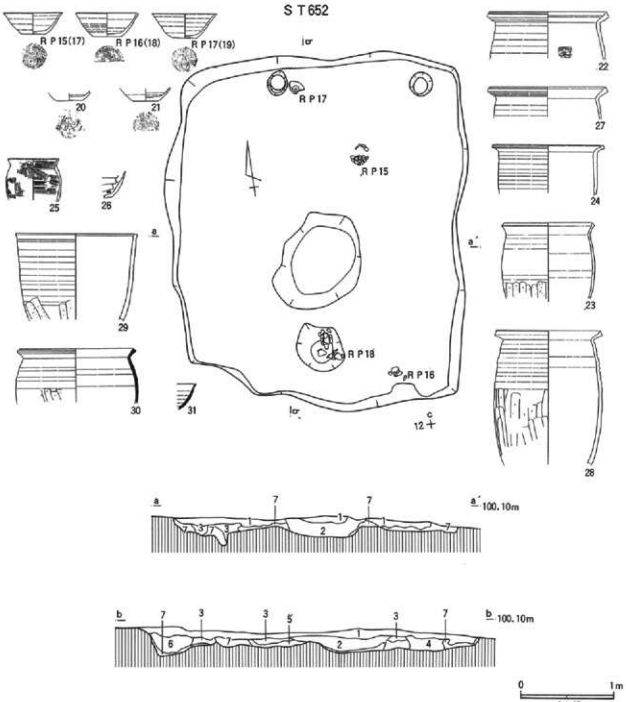
調査区の西端Ｂ・Ｃ－11グリッドにおいて検出された。平面形は、南北に長軸をとり3.7m、東西に短軸をとり3.1mの不整長方形の竪穴住居跡である。主軸方位はＮ－８°－Ｅである。床面はやや凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がるが上部は削平を受け不明である。確認面からの深さは北壁で12～22cm、東壁５～７cm、南壁５～９cm、西壁９～18cmを測る。柱穴は北側の床面から２検出された。床面からの掘り込みは、13～15cmを測る。炉跡・カマドとも検出されなかった。中央南寄りに長軸114cm・短軸86cm、床面からの深さ10cmを測る不整楕円形の落ち込みがある。３・７層の堆積土に掘り込まれていることが土層断面より観察され、この建物の付属施設ではないと考える。覆土は７層に分層され、黒褐色シルトを基調とする。

出土遺物は第16・17図参照。図示したものは15点である。竪穴住居跡の東半部の南よりに集中している。覆土内より土師器の坏(17～19)と甕(20～28)・甑(29)、須恵器の甕(30)・坏(31)が出土している。ＲＰ18(26)底部回転糸切り離しと、ロクロ成形の土師器(赤焼土器)の坏や口縁部が「く」の字状に外反し、上部につまみ上げの特徴をもつ長胴甕を中心に出土している。本住居の時期は、出土した土器の観察結果に基づいて、平安時代の後半と考える。



ST365
1 10YR 2/3 黒褐色シルト (小・中礫を多量に含む)
2 10YR 3/4 暗褐色シルト (小・中礫を含む)
3 10YR 4/6 褐色シルト (砂・小・中・大礫を含む)

第5図 ST365竪穴住居跡



ST652

1	10YR 2/2	黒褐色シルト	
2	10YR 2/2	黒褐色シルト	=1よりやや黒い(10YR 4/3にぶい黄褐色砂質シルトが5mm大の粒状に混入、全体に炭粒が散在)
3	10YR 2/2	黒褐色シルト	(10YR 4/2灰黄褐色砂質シルトと10YRにぶい黄褐色砂質シルトが1～3cm大のブロック状に多量に混入)
4	10YR 2/2	黒褐色シルト	=1よりやや灰色(10YR 4/2灰黄褐色砂質シルトがごく少量混入)
5	10YR 6/4	にぶい黄橙色砂質シルト	(10YR 2/2黒褐色シルトがまだら状に少量混入)
6	10YR 3/2	黒褐色シルト	(7.5YR 4/2灰黄褐色砂質シルトが層の中央部にレンズ状に堆積、炭粒有り)
7	10YR 5/4	にぶい黄褐色砂質シルト	(10YR 2/2黒褐色シルトがまだら状に少量混入)

第6図　ST652竪穴住居跡

2　掘立柱建物跡

ＳＢ３（第７図・図版５）

調査区中央よりやや北のＨ～Ｊ－５～７グリッドで検出された建物跡で、桁行２間、梁行２間の身舎と、四面に廂をもつ東西棟で構成する。主軸はＮ－58°30′－Ｗを測る。身舎の柱間は、南桁行が９尺（２ｍ70cm）、北桁行が約８尺（２ｍ50cm程）、東梁行が約７尺（２ｍ程）、西梁行が約６尺（１ｍ90cm程）となる。身舎四面の長さだけから言えば、かなり歪んだ建物に見える。廂の幅は、南・北面が３尺、西面が２尺、東面が約１尺を測る。柱間の長さが不揃いではあるが、桁行長６ｍ15cm、梁行長５ｍ75cmで、廂の長さについては対応している。

身舎・廂の柱穴掘方は、概ね直径20～30cmの円形または楕円形を呈する。東側では風化礫層を掘り込んでおり不整形を呈している。確認面からの深さは20cm前後のものが多く、２～６cmのものや30cm程のものも見られる。掘方は、ＥＢ143・250で柱の据方が認められるが、その他は一様でない。

柱穴覆土は、総じて20層に区分される。基調となるのは黒褐色シルトで、地山や風化礫が混入する。ほとんどの柱穴でアタリが認められる。アタリ部分は黒みが強く、黄褐色砂質シルトの混入が目立つが、柱根が遺存しているものはない。遺物は、ＥＢ264から紛れ込みの土師器小片１点のみ出土する。周囲にあるＳＰ146・145・261・266・162他の柱穴は、建物跡の柱穴と覆土や掘方の形・規模等が類似するが、この建物との関連は今のところ把握できない。

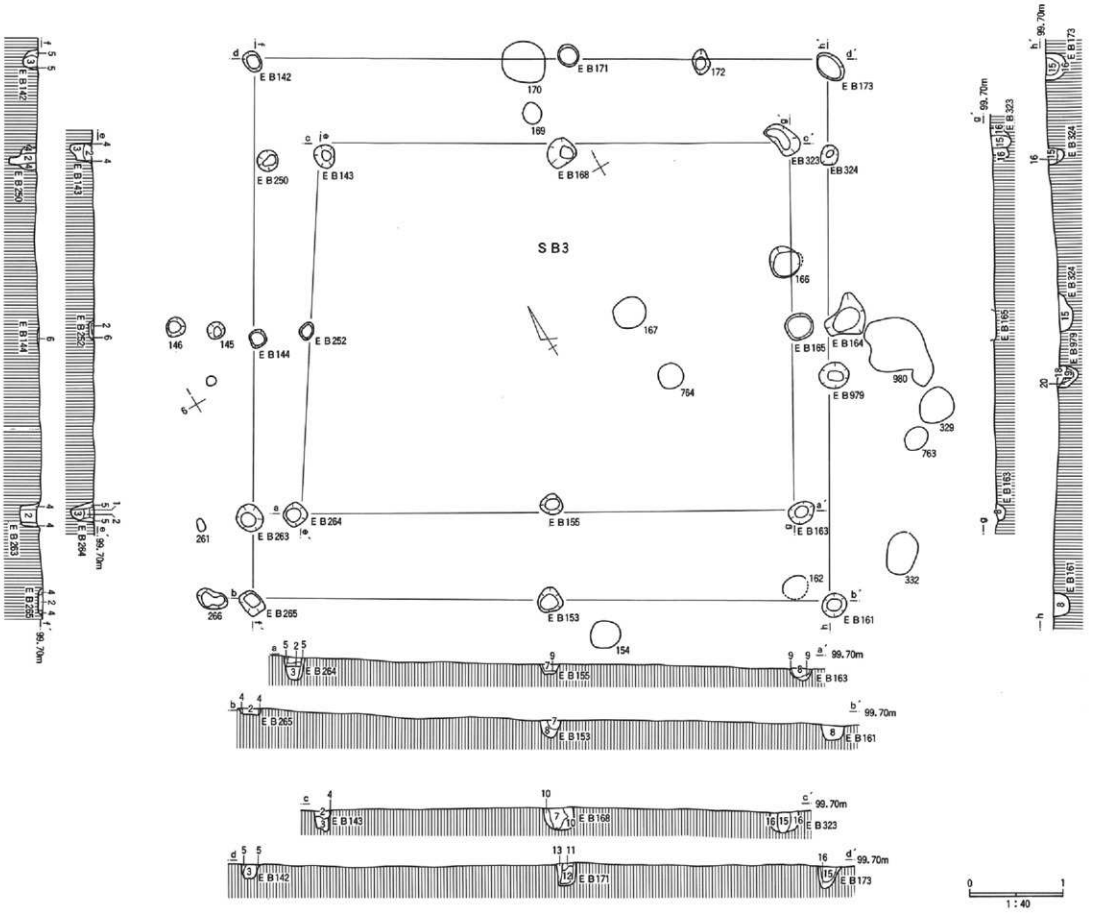
ＳＢ３の位置は、東側にＳＤ312、西側にＳＤ123の溝跡があり、両溝の間は約18m（10間）を測る。建物跡はそのほぼ中央に位置し、両溝方向と共通している。ＳＤ123からは、15世紀代と見られる青磁（63）が出土しており、恐らく両溝跡は中世の区画溝と考えられる。さらに、ＳＢ３とその６ｍ南側にあるＳＥ276は、建物の東西方向と並行に配置されている。ＳＢ３の建物跡の時期は、ＳＤ312とＳＤ123との関連から、中世に造られ機能した建物と考えられる。

ＳＢ２（第８図・図版６）

調査区北半域のグリッド西壁際、Ｆ～Ｇ－４～５に位置する。西側でＳＴ93と重複する。柱間は、桁行３間以上、梁行２間の東西棟を成し、主軸はＮ－58°－Ｗを示す。柱穴はどれも直径25cm内外の円形で、深さ５～32cmを測る。地形が西から東へ傾斜しており、東側で確認面が下がったため、本来は各柱穴の深さは一定していたと推測される。掘方は一様ではないが、柱の据方がさらに５～６cm深くなっているものが４基認められる。

覆土は３層に分けられる。主として黒褐色シルトがあり、にぶい黄褐色の地山が少量混入している。覆土からアタリの痕跡は判然としない。遺物は、ＥＢ87から、紛れ込みの須恵器坏片（39）が出土している。

柱は全て軸線上にのるが、柱間に等間はなく、約５尺から約７尺までバラツキがある。南側梁行長３ｍ30cm、北側桁行長５ｍ10cm以上の建物が構成される。柱間が等間隔ではないことと、傾斜地に建てられていることから、居住空間である可能性は少なく、納屋や作業小屋のような建物が推測される。時期は、ＳＢ３掘立柱建物跡と主軸方向がほぼ同じであることと、柱穴の規模や覆土が似通っていることなどから、中世の所産と考えられる。

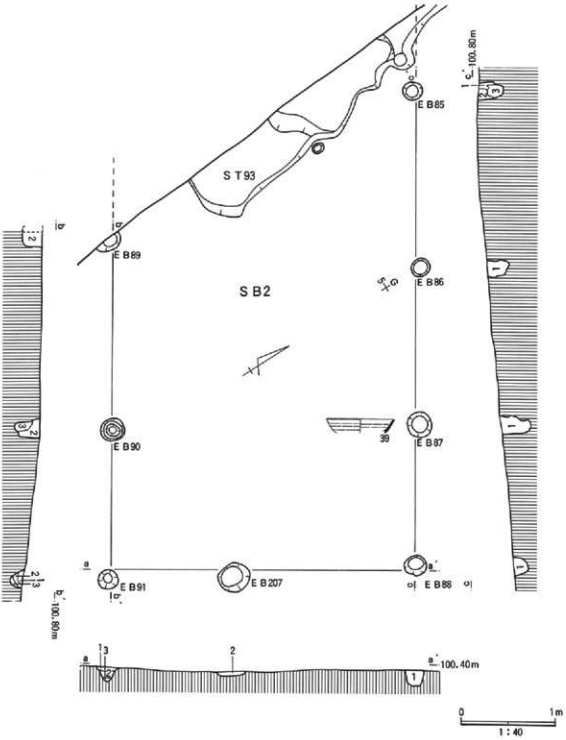


SB3

1	10YR3/1	黒褐色シルト	(10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトがlcm大のブロック状に混入)
2	10YR2/1	黒色シルト	(10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトがごく少量混入)
3	10YR3/1	黒褐色シルト	(10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトが大きなまだら状に混入)
4	10YR1.7/1	黒色シルト	(10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトがlcm大のブロック状に混入)
5	10YR3/1	黒褐色シルト	(10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトが小さなまだら状に混入)
6	10YR5/4	にぶい黄褐色砂質シルト	
7	7.5YR2/1	黒色シルト	
8	7.5YR3/1	黒褐色シルト	(10YR5/6黄褐色の風化礫と粗砂が全体に散在)
9	7.5YR3/1	黒褐色シルト	(10YR5/6黄褐色の風化礫と粗砂が大きなまだら状に混入)
10	7.5YR2/1	黒色シルト	(10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトが大きなまだら状に混入)
11	7.5YR2/1	黒褐色シルト	(10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトが小さなまだら状に少量混入)
12	10YR3/1	黒褐色シルト	(10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトがごく少量混入)
13	7.5YR2/1	黒色シルト	
14	7.5YR3/1	黒褐色シルト	(風化礫有り)
15	10YR2/2	黒褐色シルト	(10YR4/4褐色砂質シルトが少量混入)
16	10YR4/3	にぶい黄褐色砂	(10YR2/2黒褐色シルトが全体にまだら状に混入、風化礫を多量に含む)
17	7.5YR2/1	黒色シルト	(10YR3/2黒褐色粗砂が大きなまだら状に混入、2~3cm大の風化礫を含む)
18	7.5YR1.7/1	黒色シルト	
19	7.5YR3/1	黒褐色シルト	
20	10YR1.7/1	黒色シルト	(10YR4/3にぶい黄褐色シルト質微砂が少量混入)

SB3柱穴：EB142・171・173・250・143・168・323・324・144・252
165・164・979・263・264・155・163・265・153・161

第7図　SB3掘立柱建物跡



SB2
1 10YR 2/2 黒褐色シルト (10YR 5/4 にぶい黄褐色砂質シルトが1～20mm大の粒状に混入)
2 10YR 2/2 黒褐色シルト (10YR 5/4 にぶい黄褐色砂質シルトが1cm大のブロックでまだら状に混入)
3 10YR 2/2 黒褐色シルト

第8図 SB2掘立柱建物跡

3　ＳＢ４掘立柱建物跡とその周辺遺構（第９図・図版６～８）

調査区の東南隅に環状の溝（ＳＤ520）が検出され、その内側に掘立柱建物跡・土壙・溝跡・ピット等の遺構が検出された。ＳＤ520の内側において検出された遺構同士全てが関連性が有るのかどうかは確実な根拠は得られなかったものの、その環状を呈する溝と建物とを全く切り離して考えられるものではない。ここでは、ＳＤ520の内側にあった主な遺構について記述していく。

ＳＢ４（第９図・図版７）

Ｉ・Ｊ－11・12グリッドにおいて検出された。桁梁共１間の掘立柱建物である。平面形式は正方形を呈する南北棟建物跡である。主軸方向は、Ｎ－15°－Ｅを測る。柱間は、柱心心間の長さで東西・南北共10尺（300cm）を測る。柱穴は径60～100cmの不整円形（ＥＢ864・525・865）又は不整楕円形（ＥＢ848）の掘方である。確認面からの深さは、46～66cmを測る。柱根は４柱穴とも存在しない。覆土は３～４層に分かれ黒褐色シルトを基調とする。

ＳＢ４の関連施設として考えられる遺構にはＳＤ851とＳＫ523、さらにＳＤ520がある。ＳＤ851は、ＳＢ４の桁梁行と並行に掘り込まれたやや浅めの溝跡である。ＳＫ523はＳＢ４の南２ｍの所に位置する土壙で、これらの遺構内から同時代と思われる遺物が出土している。

ＳＤ851は、その浅めの掘方やＳＢ４の桁梁行と並行に走る形状からＳＢ４の雨落ち溝または、この建物を取り囲む壁部分の掘り溝にあたるものと考えられる。

ＥＢ856覆土内より土師器甕体部片が、１点が出土している。小片のため時代判別は困難であるが、これもＳＤ851とＳＫ523と同時代のものと考えられる。

ＳＤ851とＳＫ523が同時代、さらにＳＢ４が付随すると考えると、この建物は奈良時代の後半の建物と推定できる。

ＳＤ851（第７図・図版６～８）

Ｉ－11・12、Ｊ－11グリッドで検出された溝である。ＳＢ４の桁・梁行と並行に走り、総延長12.2ｍ、幅は16～32cm、確認面からの深さは４～14cmを測る。両壁ともなだらかな立ち上がりで、底面はやや起伏があり大小の礫を含む。覆土は単一層で、黒褐色シルトを基調とする。

遺物は、土師器の坏（33・34）と埦（32）、須恵器の蓋（36）と高台付坏（41）が出土している。

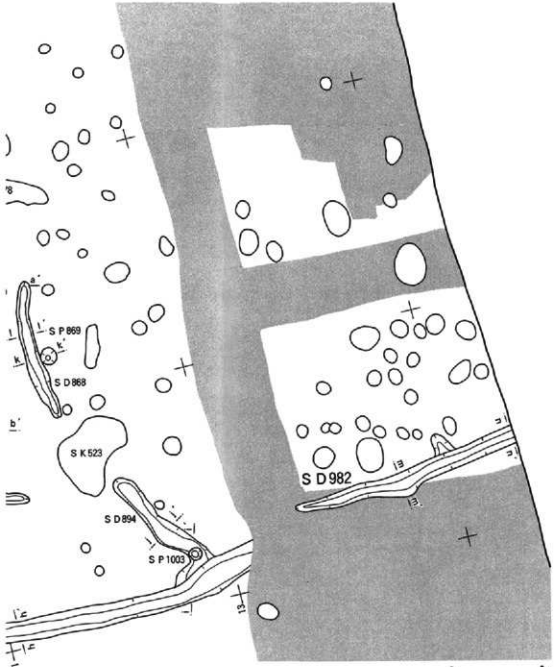
ＳＢ４の建物の軒先下雨落ち溝または、建物の壁部分を構成する板材などを埋め込むために掘り込まれた落ち込みと考えられる。

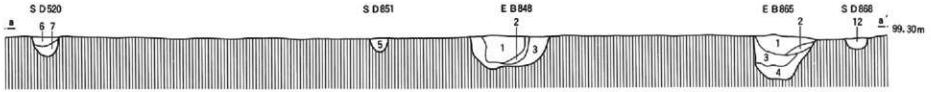
ＳＤ520（第７図・図版６～８）

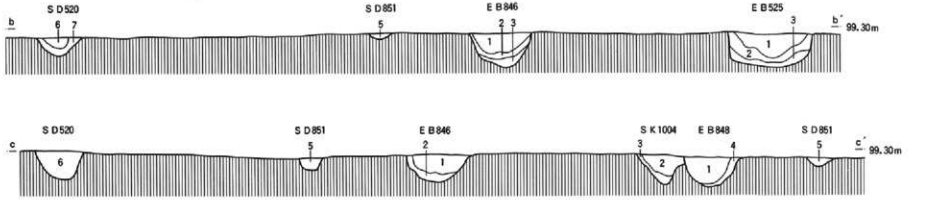
Ｉ－10～12、Ｊ・Ｋ－10、Ｋ－11グリッドから検出する。ＳＢ４の柱穴ＥＢ865を中心に弧を描くように延びているように見える。総延長は20.1ｍ、幅は24～52cm、深さは確認面から16～32cmを図る。掘方はＵ字状を呈し、やや急な立ち上がりを呈する。覆土は、２層に分かれ、黒褐色シルトを基調とする。

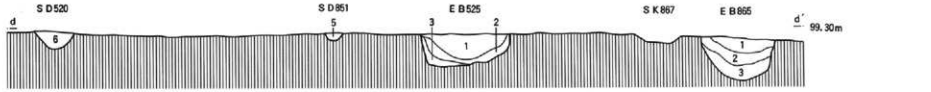
出土遺物は、須恵器の坏（38）と高台付坏（42）がある。

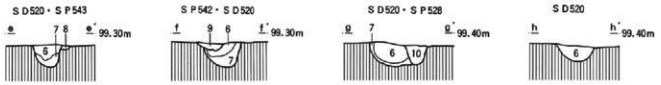
幅が狭い割には掘り込みが深く、溝の立ち上がりが急であることから、用排水路に利用された溝ではなく、ＳＢ４の建物を自然災害や外敵から守るような垣根溝または、垣を巡らせるために掘り込まれた溝であることが考えられる。すなわち、ＳＢ４の掘立柱建物のみならず、Ｓ

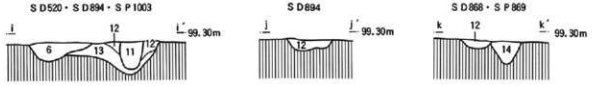












S P 543
8　10 YR 2/3　黒褐色シルト　（少量の小礫を含む）

S P 542
9　10 YR 1.7/1　黒色シルト　（少量の小礫を含む）

S P 528
10　10 YR 2/2　黒褐色シルト　（少量の小礫を含む）

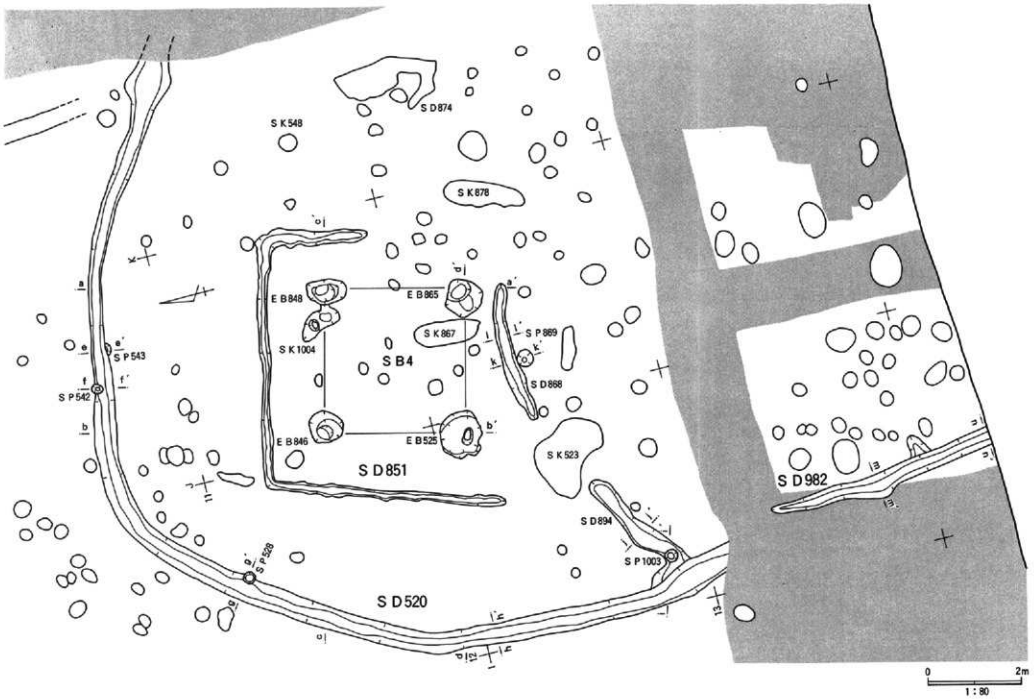
S P 1003
11　7.5 YR 3/1　黒褐色シルト　（小礫を含む）

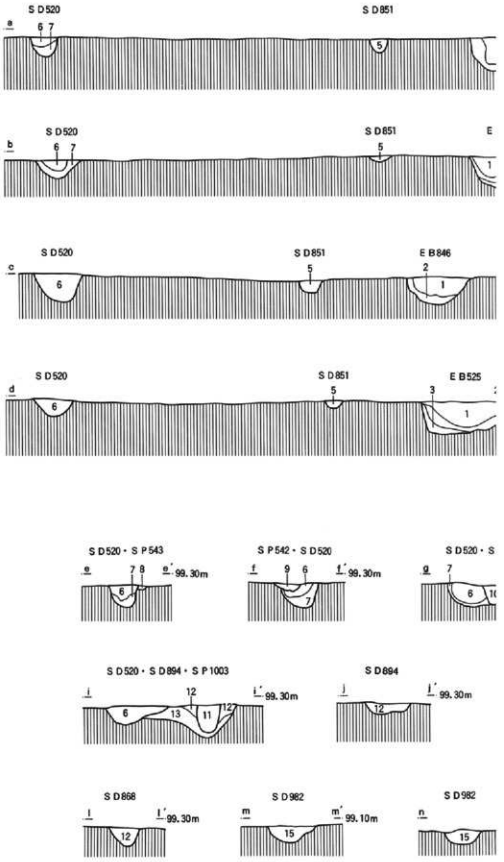
S D 894・S D 868
12　10 YR 2/2　黒褐色シルト　（小礫を含む）
13　10 YR 3/4　暗褐色シルト質砂

S P 869
14　10 YR 2/2　黒褐色シルト　（小・中礫を含む）

S D 982
15　10 YR 1.7/1　黒色シルト　（砂粒・小礫を含む）

第９図　ＳＢ４掘立柱建物跡他





S B4
1 10 YR 2/2　黒褐色シルト　（砂・小礫含む）
2 10 YR 2/3　黒褐色シルト　（砂・小礫含む）
3 10 YR 3/4　暗褐色砂質シルト
4 10 YR 3/4　黒褐色粗砂

S D 851
5 10 YR 2/3　黒褐色砂質シルト　（小礫を含む）

S D 520
6 10 YR 2/3　黒褐色シルト（小礫を含む）
7 10 YR 4/4　褐色砂質シルトに 10 YR 2/3 黒褐色シルトを大ブロック状に含む（小礫を含む）

S P 543
8 10 YR 2/3　黒褐色シルト　（少量の小礫を含む）

S P 542
9 10 YR 1.7/1　黒色シルト　（少量の小礫を含む）

S P 528
10 10 YR 2/2　黒褐色シルト　（少量の小礫を含む）

S P 1003
11 7.5 YR 3/1　黒褐色シルト　（小礫を含む）

S D 894・S D 868
12 10 YR 2/2　黒褐色シルト　（小礫を含む）
13 10 YR 3/4　暗褐色シルト質砂

S P 869
14 10 YR 2/2　黒褐色シルト　（小・中礫を含む）

S D 982
15 10 YR 1.7/1　黒色シルト　（砂粒・小礫を含む）

Ｂ４を１つの建物として有する集落を大きく区画する垣根溝の可能性も考えられる。

ＳＤ982(第７図・図版８)

Ｉ－14グリッドの南壁より、ほぼ直線的に北に延びる。北端部が建物基礎部分の撹乱を受け切られており、その先は不明である。総延長５ｍ、幅は20～25cm、深さは確認面から15cmを測る。東西の両壁ともなだらかに立ち上がる。底面は概ねなだらかである。覆土は単一層で、黒色シルトを基調とする。

この溝からは、土師器の坏(64)、須恵器の坏(76・78)・甕(72)等が出土している。

ＳＤ982が単独の溝としても捉えられるが、ＳＤ520とほぼ同時期の出土土器が検出されたことや、ＳＤ520の南端が示す方向とＳＤ982の北端の示す方向を見ると、ＳＤ520の延長の可能性も否めない。

ＳＤ868・ＳＤ894(第７図・図版８)

ＳＤ868はＩ・Ｊ－12グリッド、ＳＤ894はＩ－12グリッドより検出される。ＳＤ868は総延長３ｍ、幅は24～36cm、確認面からの深さは８～26cmを測る。ＳＤ894は総延長2.5ｍ、幅30～40cm、確認面からの深さは11～15cmを測る。ＳＤ894はその西端をＳＤ520の南端と重複しているが、断面観察では切り合いが見られない。また、ＳＤ868とＳＤ894の間にはＳＫ523があり、確認面での重複はないが、ＳＤ868－ＳＤ894をＳＫ523が切り、ＳＤ868とＳＤ894は１条の溝に繋がると考えられる。溝の形状は、弧状を呈する。両溝とも壁は緩やかに立ち上がり、底面はなだらかである。覆土は単一層で黒褐色シルト・暗褐色シルト質砂を基調とする。

これらの両溝から遺物は出土していない。

ＳＫ523とＳＫ548も共にＳＤ520の内側で検出された土壙で、特にＳＫ523はＳＢ４関連遺構と考えるが詳しくは土壙の段で後述する。

以上ＳＢ４とその周辺遺構について記述したが、環状の形状を呈するＳＤ520内の主な遺構の時代については遺構内出土遺物の観察より、８世紀後半を下らないものと判断される。

ＳＤ520が果たす機能として２通り考えられる。１つは、ＳＢ４の建物を取り囲む建物の施設としての溝である。これは、ＳＢ４を自然災害又は外敵から守るための機能をもつ溝である。ＳＤ520の段でも記述したように、溝の立ち上がりの深さ、また建物との距離からも推測されるものである。もう一つは、ＳＢ４を含む集落の垣根溝の可能性である。四ツ塚遺跡には第１次・２次調査区には、区画溝が何条か存在する。２次調査区の南東側に奈良時代の集落の存在も可能性がある。ＳＢ520や、ＳＤ868－ＳＤ894の垣根溝に囲まれた古代の集落の存在も否定できない。ＳＤ520を集落の垣根溝としたときは、ＳＢ４は、その集落の北西隅に存在した建物となり、調査区南東に古代集落の広がりの可能性を示す。しかし、第１・２次調査を総合しても検出・出土資料不足のため推定の域を越えない。

4　溝跡・道路状遺構(第10～12・図版９・10)

溝跡は、長短合わせて、11条検出されている。先にＳＤ520とＳＤ851・ＳＤ982については、ＳＢ４周辺の遺構として述べているので、その以外の溝について記述する。溝については、切り合いによって新旧関係が分かるものから記述を並べ、関連性がある溝へと掲載を続けた。その他の溝については、今年度または昨年度の調査でおおよその時代が推定されるので、時代を溯る順に並べた。

なお、溝の時代に関しては、およそ奈良・平安時代の溝と中世の溝に大別ができる。

ＳＤ362(第10図・図版９)

Ｃ－８・９グリッドの西壁(風倒木と重複)から東にほぼ直線的に延びる。東端は、Ｈ－９グリッドで風倒木にぶつかり、それより東は不明である。総延長は24.7m、幅は約20～70cm、深さは確認面から８～20cmを測る。覆土は２層に分かれ、黒褐色シルトを基調とする。ＳＤ123とＥ－８・９グリッドで重複し、ＳＤ123がＳＤ362を切っている。この溝からは、土師器片が７点と接合されたものが２点出土している。

ＳＤ123(第10図・図版９)

Ｊ－３グリッドでＳＤ124と直交する点を基点とすると、そこからほぼ直線的に(ゆるい弧を描きながら)南西に延び、Ｅ－10グリッドでほぼ直角に折れ、西に向きを変える。直角に曲がった所から西へ約10mほど進んだ所(Ｇ・Ｈ－７・８グリッド)で、建物の基礎部分に攪乱され消滅する。総延長は53.1m、幅は60～100cm、深さは確認面から約30cmを測る。南北に走るときの東西の壁は、両壁とも緩やかに立ち上がるが、西壁に比して東壁の立ち上がりがやや急である。覆土は、１・２層に分かれ、黒色シルト・黒褐色シルトを基調とする。Ｊ－３グリッドでＳＤ124と直交し、ＳＤ124がＳＤ123を切っている。さらにＥ－８・９グリッドでＳＤ362と直交し、ＳＤ123がＳＤ362を切る。この溝からは、土師器の坏(50)・甕(47・49)、須恵器の蓋(51)・坏(52～56)・高台付坏・甕・横瓶などの遺物が出土している。

ＳＤ312(第10図・図版８・９)

Ｋ－６グリッドの攪乱部分から南西へほぼ直線的に延びる。Ｋ－６・７とＪ－７～９グリッドを通りＩ－９グリッドで消える。南端は不明である。総延長は16.8m、幅は40～80cm、深さは確認面から12～22cmを測る。東西の壁は、ほぼ緩やかに立ち上がる。底面は大小の礫を含む地山がみられ凹凸がある。覆土は２層または単一層で、礫を含む黒褐色シルトとにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。須恵器の甕(73)の破片が出土している。

ＳＤ402(第10図・図版８)

Ｋ－８～10グリッドにおいて検出された。調査区東側の削平された部分(Ｋ－８グリッド)から北西方向にほぼ直線的に４ｍほど延び、南に向きを変える。総延長は14.1m、幅は35～70cm、深さは確認面から20～25cmを測る。底面は概ねなめらかで凹凸がなく、東西の壁ともゆるやかに立ち上がる。覆土は２層に分かれ、黒褐色シルトを基調とする。ＳＤ401と重複しており、ＳＤ402がＳＤ401を切っている。このＳＤ402は、昨年度の調査で検出されたＳＤ1610の延長に当たると思われる(第21図)。ＳＤ402の溝内において土器は検出されなかったが、ＳＤ1610の覆土

から、土師器の坏・甕・内黒土器の坏、須恵器の坏・甕・蓋等破片で51点出土している。

道路状遺構(第12図・図版10)

調査区の北東隅に並行して走る2条の溝跡が検出された。北東側のＳＤ959は、Ｊ－１、Ｋ－１・２、Ｌ－２・３グリッドで検出される。Ｊ－１グリッドの北壁から直線的に南東へ延び、東端は、調査区東側の削平部分に消える。幅50～120cm、確認面からの深さは20～24cmを測る。南西側のＳＤ124はＩ－２、Ｊ－２・３、Ｋ－３・４、Ｌ－４グリッドで検出される。Ｉ－２グリッドから直線的に南東へ延び、東端はＳＤ959同様調査区東側削平部分に消える。西端部もＩ－２グリッド以北は削平を受けている。幅50～110cm、確認面からの深さは20～35cmを測る。ＳＤ124はＨ－２グリッド以北削平を受け不明である。主軸方位はＮ－44°－Ｗを測る。両溝の心々距離は平均して約18尺(555cm)を測る。

ＳＤ959・ＳＤ124両溝の南北壁とも概ね緩やかに立ち上がり、覆土は３層に分かれ、黒色シルト・黒褐色シルトを基調とする。

道路面の断面を観察すると、ＳＤ959・124の掘り込みは、基本層序ｂ－ｂ′、ｃ－ｃ′において第Ⅱ～Ⅴ層を貫いている(第４図・第12図)。ＳＤ123とＳＤ124の切り合いにおいてＳＤ123とＳＤ124の新旧関係は容易に判断のできるところである。

出土遺物は、ＳＤ124から土師器の甕(48)と須恵器の横瓶(61)、青磁の碗(63)がある。

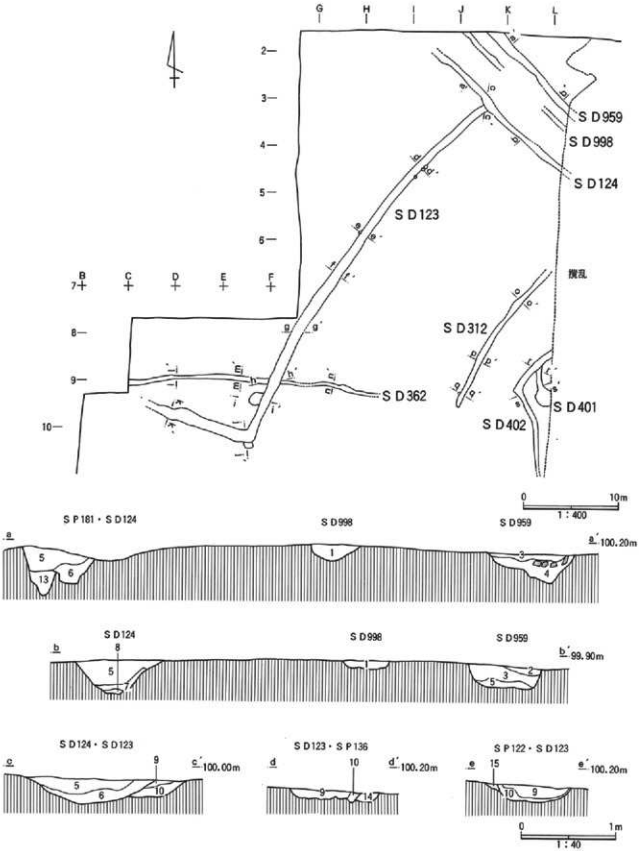
昨年度の調査では、道路状遺構の両脇を挟む溝としてＳＤ555とＳＤ1002が検出されている(付図)。さらにその北東側の溝ＳＤ555を切るＳＥ1465が検出された。その井戸跡の覆土より十和田ａテフラが検出された。十和田ａテフラの降灰時期は915年であり、よって１次調査ではＳＤ555溝跡またこの溝を伴う道路状遺構は、古代時の所産であると判断された。しかし、ＳＥ1465第１層の覆土にＳＤ555が含まれる可能性が検討され、さらに、今年度の調査の道路遺構を挟む溝の一方ＳＤ124から15世紀代と思われる青磁の碗(63)が出土している。よってこのＳＤ124に挟まれる部分は、中世まで所産していた可能性がでてきた。もしくは、古代の道として機能し、中世にまでも機能或いは再利用された可能性がある。

ＳＤ998(第10図・図版10)

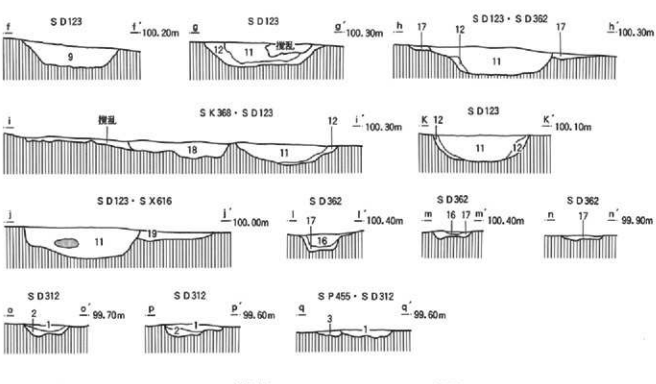
Ｊ－Ｉ・２、Ｋ－２・３、Ｌ－３グリッド、道路状遺構面より検出された。調査区北壁Ｊ－Ｉグリッドから南東へほぼ直線的に延びる。総延長14.5m、幅55cm～80cm、深さは確認面から約10cmを測る。南北の両壁とも緩やかに立ち上がる。底面は凹凸があり、大小の礫がある。覆土は単一層で、黒褐色シルトを基調としている。第４図の基本層序ｃ－ｃ′の断面に見られるように、道路遺構の第Ⅱ・Ⅲ層を切って溝ＳＤ998が掘り込まれている。

その他の溝(ＳＤ983)

Ｇ－12グリッドから検出された。東西に直線的に延びる溝で、東西端は、検出されず不明である。総延長は2.5m、最大幅20cm、確認面からの深さは10cmを測る。南北壁共緩やかに立ち上がり、覆土は単一層で、黒褐色シルトを基調とする。出土遺物はない。



第10図　SD998・959他溝跡



S D998

1	10YR3/2	黒褐色シルト	(5cm 大の風化礫が全体に混入、10YR4/3にぶい黄褐色シルト質砂が一部分に混入)

S D959・S D124・S D123

2	10YR2/1	黒色シルト	
3	7.5YR3/1	黒褐色シルト	
4	7.5YR3/1	黒褐色シルト	(5～10cm 大の礫が全体に混入)
5	7.5YR2/1	黒色シルト	
6	7.5YR2/1	黒色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルトがまだら状に全体に混入)
7	7.5YR2/1	黒色シルト	(10YR3/2黒褐色シルトとⅣが少量混入)
8	7.5YR2/1	黒色シルト	(7.5YR3/2黒褐色シルトがまだら状に混入)
9	10YR1.7/1	黒色シルト	
10	10YR2/1	黒色シルト	(7.5YR6/4にぶい黄橙色シルトが1～2cm 大のブロック状に混入)
11	10YR2/2	黒褐色シルト	(全体に1～2cm の礫が混入)
12	10YR2/2	黒褐色シルト	(全体に1～2cm の礫が混入、10YR6/4にぶい黄橙色シルトがまだら状に混入)

S P181

13	10YR2/1	黒色シルト	

S P122

14	10YR3/1	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルトが1cm 大の粒状に混入)

S P136

15	7.5YR3/1	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルトが少量混入)

S D362

16	10YR2/2	黒褐色シルト	
17	10YR2/2	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄褐色砂質シルトがまだら状に混入)

S K368

18	10YR3/2	黒褐色シルト	(全体に1～10cm 大の礫が多量に混入)

S X616

19	10YR3/2	黒褐色シルト	(全体に3～5cm 大の礫が混入)

S D312

1	10YR1.7/1	黒褐色シルト	(1～5cm 大の礫が混入)
2	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	(10YR1.7/1黒色シルトが少量混入、1～5cm 大の礫が混入)

S P455

3	10YR2/2	黒褐色シルト	

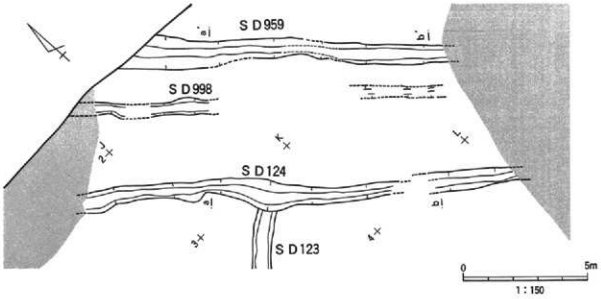
S D402

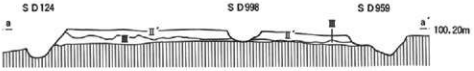
1	10YR2/3	黒褐色シルト	(小礫を多量に含む)
2	10YR3/2	黒褐色シルト	(小礫を多量に含む)

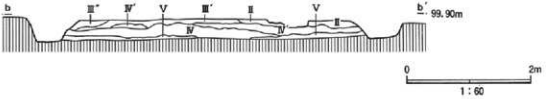
S D401

3	10YR3/4	暗褐色シルト	(砂・小礫を多量に含む)

第11図　S D123・362他溝跡







道路状遺構断面

Ⅱ'	10YR3/1	黒褐色シルト	(2cm 大の風化礫が全体に混入)
Ⅱ	10YR3/1	黒褐色シルト	
Ⅲ"	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	(10YR3/1黒褐色シルトがⅡ'より多量に混入)
Ⅲ'	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	(10YR3/1黒褐色シルトがまだら状に混入)
Ⅲ	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	
Ⅳ'	10YR3/3	暗褐色粗砂	(2～10cm 大の風化礫が混入)
Ⅳ	10YR3/3	暗褐色粗砂	(10YR3/2黒褐色シルトがまだら状に混入)
Ⅴ	7.5YR3/2	黒褐色シルト	

※ローマ数字は全て基本層序b－b'、c－c'

第12図　道路状遺構

5　土壙

ＳＫ523(第13図・図版11)

Ｉ－12グリッドで検出する。長軸170cm、短軸105cmの不整形で南北に長い。深さは確認面より40cmを測る。覆土は４層に分かれ、黒褐色砂質シルトを基調とする。壁は傾斜をもって緩やかに立ち上がる。南側に落ち込みがあり、最深値を示す。ＳＢ４周辺遺構で前述した通り確認面上の重複は見られないが、(第９図)ＳＤ868とＳＤ894が同一溝であると考えると、ＳＤ868－ＳＤ894を切る形でＳＫ523が存在する。

出土遺物は土師器の坏(34)や甕(45～46)、須恵器の甕(35･37)と坏(40)などがある。ＳＤ520やＳＤ851と同時代と思われる。

ＳＫ548(第13図・図版10)

Ｋ－11グリッドで検出する。平面形は円形を呈し、直径は30cm、確認面からの深さは10cmを測る。覆土は黒色シルトを基調とする単一層である。東壁はやや急に立ち上がるが、それ以外の壁はなだらかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。

この土壙から須恵器の甕(43)が出土した。他遺構と重複関係はないものの、土器の年代からＳＢ４とその周辺の溝・土壙と同じ時代と思われる。

ＳＫ580(第13図・図版11)

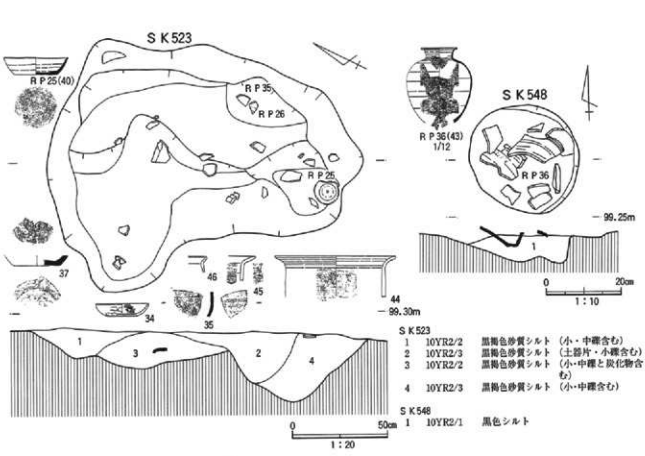
Ｇ－９グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、直径110cm、確認面からの深さ34cmを測る。掘方は、東側では緩やかに、西側では段状に、底面ではさらに掘り込まれている。覆土は、黒色シルトを基調として、黄褐色の地山が含まれる４層からなり、北西方向からの自然流入による堆積と見られる。

遺物は、ＲＰ23(65)が２層最上部、ＲＰ22墨書土器(69)が２層最下部、ＲＰ21(81)が３層最下部から出土しており、４層中から須恵器高台付坏(80)が出土している。また底面直上からは須恵器片３点が出土している。時期は、ＳＢ４周辺の遺構から出土している土器と比べて、大きな時間差はないと考えることから、８世紀半ば以降と思われる。

ＳＫ729（第13図・図版11)

Ｄ－11グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径146cm・短径136cm・確認面からの深さ63cmを測る。北側で深さ15cm程が攪乱を受けている。掘方は東・南壁にかけてほぼ垂直に掘り込まれるが、北壁は深さ約50cm付近で袋状を示す。底面は概ね平坦であるが、東壁付近で凹凸が見られる。掘方の壁を観察すると、確認面から15～20cmが地山の漸位層で、暗褐色シルトの堆積であり、以下の地山はにぶい黄褐色シルトである。

覆土は８層に分けられる。１～６層は黒褐色シルトに地山が砂・炭が細かく混じり、７・８層は、黒色シルトにブロック状の地山が混じる。これらは大きく上下２層に判別され、上層は自然堆積、下層は遺構廃棄後の人為堆積と見られる。遺物は６層からＲＰ32土師器甕(67)が出土しているほか、２・４層から土師器片６点、５層から土師器甕(68)、下層から須恵器坏(79)と須恵器甕片１点が出土している。時期は、出土遺物から見て８世紀後半と考えられる。

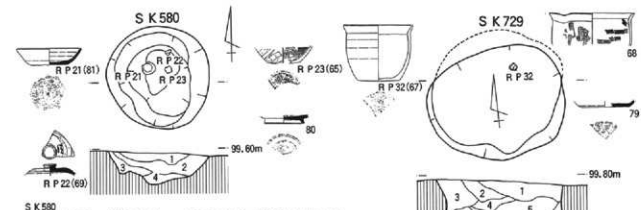


S K 523

1	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	(小・中礫含む)
2	10YR2/3	黒褐色砂質シルト	(土器片・小礫含む)
3	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	(小・中礫と炭化物含む)
4	10YR2/3	黒褐色砂質シルト	(小・中礫含む)

S K 548

1	10YR2/1	黒色シルト	



S K 580

1	7.5YR2/2	黒褐色シルト	(10YR5/4にぶい黄褐色粘土粒を含む)
2	7.5YR2/2	黒褐色シルト	=1より色調が黒みを増す (7.5YR3/2黒褐色シルトが5~6cm 大のブロック状で中央から下層にかけて混入)
3	7.5YR1.7/1	黒色シルト	(10YR5/4にぶい黄褐色シルトが粒状に混入)
4	7.5YR1.7/1	黒色シルト	(10YR5/4にぶい黄褐色シルトが2~3cm 大のブロック状に混入、小礫が混じる。)

S K 729

1	10YR2/2	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルトが2mm 大の粒状に全体に混入、微量の砂粒が混じる)
2	10YR2/3	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルトが1cm 大のブロック状及び粒状に全体に混入、炭粒・土師器片有り)
3	7.5YR3/1	黒褐色シルト	
4	10YR2/2	黒褐色シルト	=1よりやや黒い(10YR6/4にぶい黄橙色シルトが1cm 大のブロック状及び粒状に全体に混入、炭粒・土師器片有り)
5	10YR2/3	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルトが1~2cm 大のブロック状及びまだら状に全体に混入するが、層の中央部に多く混入)
6	7.5YR2/2	黒褐色シルト	(7.5YR5/6明褐色砂質シルトが2cm 大のブロック状及び5mm 大の粒状に全体に混入さらに1~2cm 大の炭が全体に混入、R P 32出土層)
7	7.5YR1.7/1	黒色シルト	(10YR6/3にぶい黄橙色シルトが2cm 大のブロックで1塊混入)
8	7.5YR1.7/1	黒色シルト	(10YR4/3にぶい黄褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色シルトが1~5cm 大の斑点状に混入、層の下部に多い)

第13図　S K 523・548他土壙

6　井戸跡

ＳＥ276(第14図・図版11)

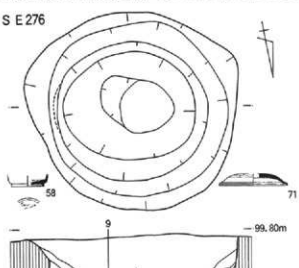
調査区ほぼ中央のＨ－７グリッドに位置し、直径２ｍ20cm前後の円形プランを呈する。確認面からの深さは１ｍ54cmを測る。掘方は、上部ではほぼ垂直で、深さ60cm辺りでやや緩やかになり、さらに垂直に50cm程掘り込まれ、底面まで緩やかに狭まっていく。東壁で深さ80cm付近がオーバーハングしている。底面はほぼ平坦である。周辺には、６ｍ北に中世のＳＢ３掘立柱建物跡が６ｍ西にＳＤ123溝跡が、それぞれ隣接している。

覆土は、黒色粘質シルトを基調として地山が混じり、14層に分けられる。１～４層は黄橙色シルト質粘土や、黒色シルトがブロック状に混在するなどの理由から、人為堆積と考えられる。深さ90cm位に、井戸廃棄後に投げ込まれたと思われる拳大から人頭大の礫が埋没している。５～14層については堆積状況と土層観察から、自然堆積したものと捉えることができる。

周壁の地山は上から黄褐色砂質シルト(地山１)、黄褐色砂(地山２)、灰白色粘質シルト(地山３)、にぶい黄褐色粗砂(地山４)となる。地山４からは調査時にも冷涼な水が湧き出ており、地山２からも少量の湧水が見られたことから、滞水層は地山２・４と言える。

出土した遺物は大半が土師器、須恵器の小片で、１～４層から60点余りが出土している。中には、６ｍ西に位置する、ＳＤ123溝跡から出土した、須恵器高台付坏の破片との接合資料が確認された。５層からも４点出土しているが、底面近くからの出土遺物はない。

この井戸の時期は、ＳＤ123・ＳＤ312、さらにＳＢ３との位置関係や方向から見て、何らかの関連性または共通性があると考えられることから、井戸は中世に機能していたと思われる。



ＳＥ276

1	10YR2/2	黒褐色シルト	(7.5YR2/1黒色シルトが不整レンズ状に堆積し、10YR4/4褐色砂質シルトが3cm 大のブロック状に少量混入、風化礫が全体に混じる)
2	10YR1.7/1	黒色粘質シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルト質粘土が2cm 大のブロック状に混入)
3	7.5YR1.7/1	黒色粘質シルト	(10YR3/2黒褐色シルトが20cm大のブロック状及びまだら状に混入、特に層の東半分に多量混入)
4	7.5YR3/1	黒褐色シルト	
5	7.5YR2/1	黒色粘質シルト	
6	7.5YR2/1	黒色粘質シルト	(10YR4/3にぶい黄褐色シルトが2cm 大のブロック状及び斑状に混入)
7	7.5YR2/1	黒色粘質シルト	(10YR5/4にぶい黄褐色シルトが1～1.5cm 幅の縞状に混入)
8	7.5YR3/1	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルト質粘土1cm 大の粒状及び細粒状に全体に混入)
9	10YR2/2	黒褐色シルト	
10	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト質砂	
11	10YR1.7/1	黒色粘土	
12	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト質砂	(10YR1.7/1黒色シルト質粘土が細かい縞状に混入)
13	7.5YR2/1	黒色粘質シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルトが2cm 大のブロック状及び細かいまだら状に混入、層の両端に目立つ)
14	10YR6/4	にぶい黄橙色粘土	(7.5YR2/1黒色シルト質粘土がまだら状に全体に混入)

第14図　ＳＥ276井戸跡

V　出土した遺物

今年度の第２次調査で四ツ塚遺跡調査から出土した遺物は、整理箱にして10箱である。面整理の遺構確認面上で検出されたものもあるが、多くは竪穴住居跡・溝跡・土壙等の遺構に伴う遺物である。器種的には、土器・陶磁器である。土器は土師器・須恵器を中心に、概ね奈良時代・平安時代に帰属する土器が大半である。以下にそれらを記述する。

1　土師器

調査区の全域から出土している。出土している土師器は、非ロクロ成形とロクロ成形に大別することができる。器種は坏・埦・高台付坏・甕がある。坏・埦には内側をミガキの後黒色処理された内黒土器も出土している。

ロクロ成形の土器には坏・甕・甑がある。「ロクロないしタタキによる整形など技術的に須恵器の技法を用いながら、意図的に酸化焔焼成を行っている土器」を総称して「赤焼土器」と呼んでいる。本遺跡と同じ河北町内の不動木遺跡(1986:長橋至他)においても、本県の庄内地方でいう赤焼土器甕を含めて、ロクロ使用で、タタキの認められない甕は土師器として扱っている。「赤焼土器」の範疇に関しては、県内発掘の各遺跡において諸説(佐藤庄、阿部、渋谷、長橋、佐藤正他)はあるが、本報告書においては土師器の一類型として取り扱った。

2　須恵器

調査区全域から出土し、器種には坏・高台付坏・蓋・甕・壺・横瓶がある。

坏では底部の切り離しがヘラ切りのものと回転糸切りのものが存在する。無調整のものが多い中で、外面にナデ・ケズりの調整が見られるものがある(10・11・14・30・36・40・54)。高台付坏も回転ヘラ切り(41)と回転糸切り(57・59・80)手法による切り離しで付高台が存在する。蓋については、７・８は破片資料であり、51・69・71の天井部はいずれも回転ヘラ削りの痕跡を残す。

壺は破片資料である。甕は43が復元実測により全容が見られたものの、その他はすべて破片あるいは口縁部資料である。打圧調整のタタキとアテの組合せは、平行タタキと同心円ないし青海波のアテ(73)・平行タタキと平行アテ(62)・上半が平行タタキと同心円ないし青海波のアテ、下半が平行タタキと平行アテ(43)などが見られた。

横瓶は、破片資料が２点出土している。61の内側には粘土が貼られ、破片内面の上部には同心円ないし青海波のアテ、下部には無紋のアテ並びに指頭痕がある。

3　ＳＴ365出土土器（第15図・図版12）

竪穴住居跡の床面または検出面上である程度まとまって出土した。遺物は、南北の中心線より東に偏っており、特に南東部に集中する。土師器の甕(１～６)、須恵器の蓋(７・８)・坏(９～14)・甕(15)・壺(16)が出土している。個体数的には土師器よりも須恵器の方の割合が高くなっている。土師器の甕の中には口縁部が「く」の字状に外反しているものや、底部に木葉痕があるものが２点出土している。３の甕は、粘土を張り合わせたように２重の層がみられ、一部はがれ層を露呈している。須恵器の蓋は、図化できたものが２点あり、いずれも少し歪み

が見られる。須恵器の坏の底部切り離しはヘラ切り、または回転ヘラ切りである。9・10・14の内外面には火襷の跡が確認された。10・11・14については底部から口縁までの立ち上がりが観察される。10は底部から口縁まで内弯しながら緩やかな傾斜で立ち上がり、11・14は底部から口縁までやや直線的な立ち上がりを呈している。なお14の方が立ち上がりは急である。須恵器の甕(15)と壷(16)は破片資料である。

4　ＳＴ652出土土器（第16図・図版12・13）

ＳＴ652はＳＴ365の北西約18mの所に位置する竪穴住居跡であるが、出土した遺物は、ＳＴ365と様相を異にし、器種も須恵器に比して土師器の占める割合が大きくなっている。出土した土器は、土師器の坏(17～19)・甕(21～28)・甑(29)、須恵器の坏(31)・甕(30)である。土師器の坏は、いずれもロクロ成形が施されており、上記で記述した赤焼土器の範疇に入る。土師器の甕はいずれも「く」の字状に長く外反した後、口唇部が上方(又は内側)につまみ出されるという共通性が認められる。25は体部の膨らみの度合いが少ないが、他は体部上半にふくらみをもつ。23・28の体部下半にケズリが施されている。いずれも底部資料は出土していない。
29も底部資料はないが下半にケズリ調整が施されている。30は、多少酸化しており、自然釉が確認される。

ＳＢ４周辺遺構出土土器(第17～18図・図版14～19)

ＳＢ４周辺遺構としてＳＤ520・ＳＤ851・ＳＫ523・ＳＫ548・ＳＤ982をあげている。本遺跡の主体である奈良・平安時代の遺構出土土器の中でも最も古い様相を呈する土器群である。

①　ＳＤ520出土土器(第17図・図版14)

須恵器の坏(38)と高台付坏(42)が出土している。38は下半でやや内弯するが、上半は口縁部に向かい直線的に外反する。42の高台付坏は急角度で立ち上がる身の深い器形をもつ。

②　ＳＤ851出土土器(第17図・図版14)

土師器の坏(33・34)・(32)と須恵器の蓋(36)・高台付坏(41)が出土している。32～34は底部の切り離しがいずれも手持ちヘラ削りで、32・33は内面にミガキをかけられた後黒色処理が施されている。34の内面はケズリが施されたのみである。埦・坏ともやや内弯ぎみに立ち上がり、底部が丸底風平底である。36にはつまみ部中央の突出が顕著でないが若干突出するつまみがつけられる。天井部が平坦で回転ヘラ削り痕を明瞭に残す。内底部を転用硯として使用されている痕跡がある。内部中央にタタキ状の縞状痕がある。41は、下半が内弯ぎみに立ち上がった後、上半から口縁は直線的になる。

③　ＳＫ523出土土器(第17・19図・図版14)

土師器の坏(34)・甕(44～46)と須恵器の坏(40)・甕(35・37)が出土している。34は内面にミガキがかけられており、底部は手持ちのヘラ削りの調整を受けている。40は底部が回転ヘラ切りの後ナデ調整の痕がある。底部から口縁がやや内弯ぎみであるが比較的直線的に立ち上がる。35は須恵器体部片で、内外面とも掘りの浅いハケメが確認される。37は底部片で内外面共ハケメ調整が施されている。

④　ＳＫ548出土土器(第18図・図版16)

須恵器の甕(43)が1点のみ出土している。口径234㎜・器高487㎜・体部最大径420㎜(推定)と、実測し計測値が出された中では、本遺跡出土土器の最大の遺物となり得る。口縁から体部の上部にかけて被灰を受け、自然釉となっている。頸部が直立した後、口縁部に向かってゆるやかに外反し、口縁直下で急激に外反している。口頸部はロクロ整形である。体部外面は全体に平行タタキ、体部内面上半が青海波アテ・下半平行アテの組み合わせとなる。

⑤　ＳＤ982出土土器(第20図・図版15・16)

土師器の坏(64)と須恵器の坏(76・78)・甕(72)が出土している。64は内面にミガキをかけられた後黒色処理が施されている。ＳＤ851の内黒土器の坏と比して器厚が厚く、内弯も緩やかである。76・78の坏は口径に比して底径が広く、底部切り離しは回転ヘラ切りである。78は、底部から口縁が比較的直線的に立ち上がる。

6　ＳＤ123Ｓ出土土器（第19図・図版14)

土師器の坏(50)・甕(47・49)と須恵器の蓋(51)・坏(50・52～56)・高台付坏(57～59)・甕(62)・横瓶(60)が出土している。

7　ＳＤ124・ＳＤ959出土土器（第19図・図版15)

ＳＤ124とＳＤ959は、道路遺構を挟む溝である。ＳＤ124からは土師器の甕(48)と須恵器の横瓶(61)さらに青磁の碗(63)が出土している。48は底部でヘラナデ痕がある。61の内面には、同心円ないしは青海波・無文のアテ痕並びに指頭痕がある。63の青磁碗は、龍泉系の青磁釉が施され、内外面共に釉薬が貫入している。15世紀代のものと考えられる。

8　ＳＫ580出土土器（第20図・図版15)

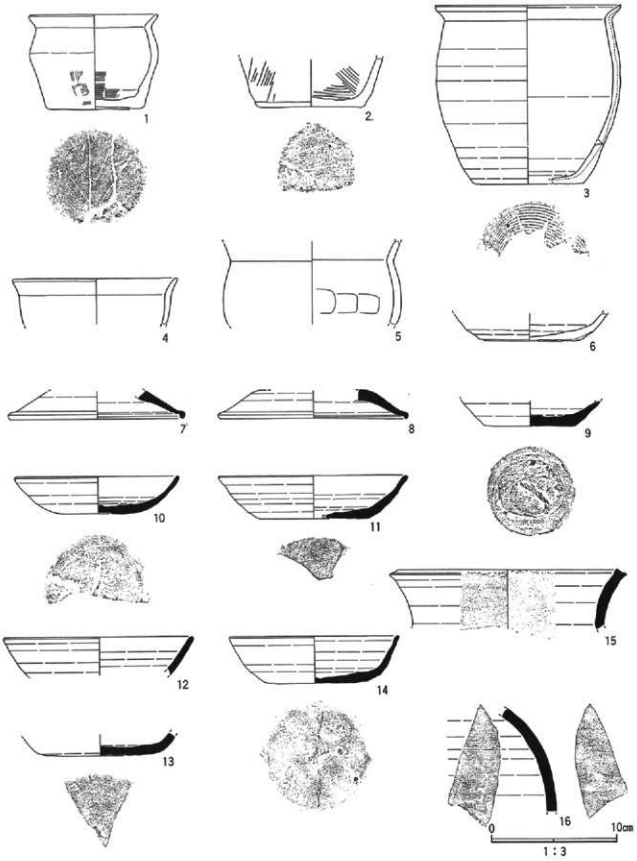
土師器の坏(65)と須恵器の蓋(69)・坏(81)・高台付坏(80)が出土している。65は、内部がミガキガかけられた後黒色化されている。底部が手持ちヘラ削りで丸底風になっており、木葉痕がある。69の蓋は、ロクロから回転ヘラ切りによって切り離された後、天井部に回転ヘラ削りが施されている。中央部の窪むつまみがつけられており、そのつまみの横には「臣」か「所」と読まれる墨痕がある。81の底部は回転ヘラ切りの後ナデが施されている。80は底部のみで、回転糸切りによって切り離され、外側に張り出すような高台が付く。65・69・81に関してはＳＢ4周辺の溝等の遺構から出土した土器と同時期と思われる。

9　ＳＫ729出土土器（第20図・図版15・16)

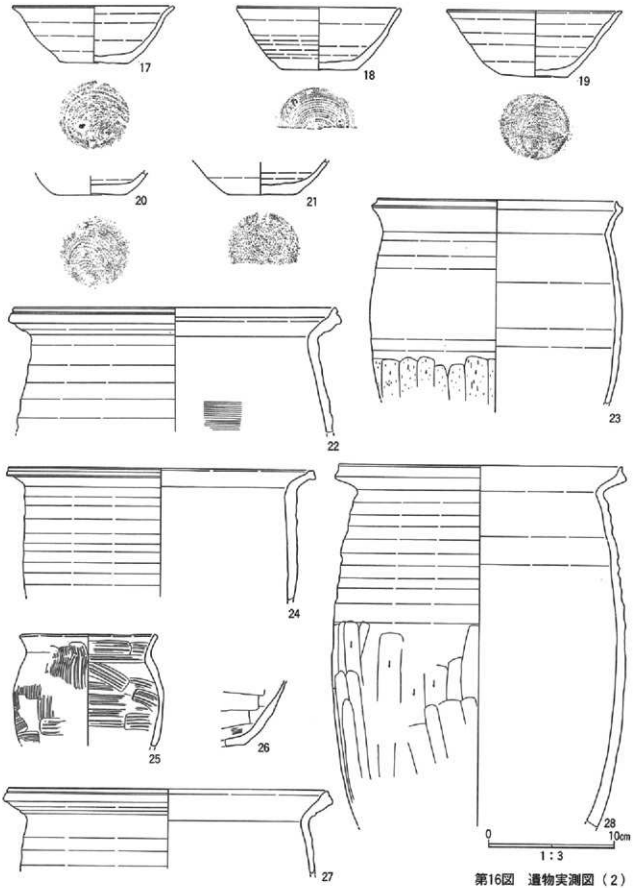
土師器の甕(67・68)と須恵器の坏(79)が出土している。67は口縁部に最大径のある中形の甕である。口縁部は短く外反した後、上方に長くつまみ出されている。底部に木葉痕がある。68も口縁部に最大径があるものと思われるが、口縁部資料のみである。外面に縦方向、内面に横方向のハケメがある。いずれもロクロは使われていない。

10　その他の出土土器（第20図・図版14・16)

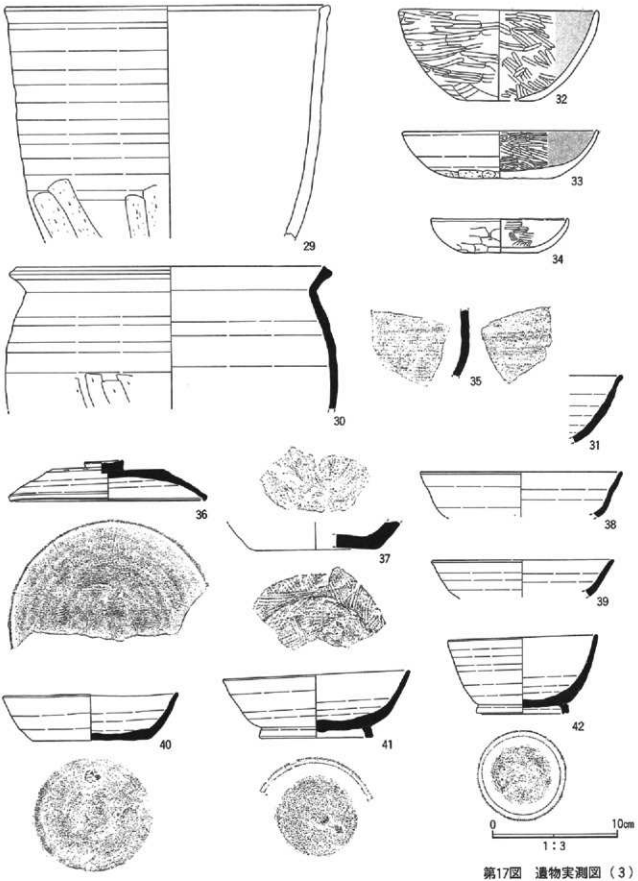
Ｉ－13グリッド表土上から須恵器の甕(70)が出土している。70は、土師器の甕底部のみで、外面に縦方向のケズリ、内面にハケメ調整が施されてある。75は、Ｉ－14グリッド表土上から須恵器の甕で口縁のみである。Ｋ－７グリッドから須恵器の坏(77)底部が出土している。切り離しの回転ヘラ切りが確認される。



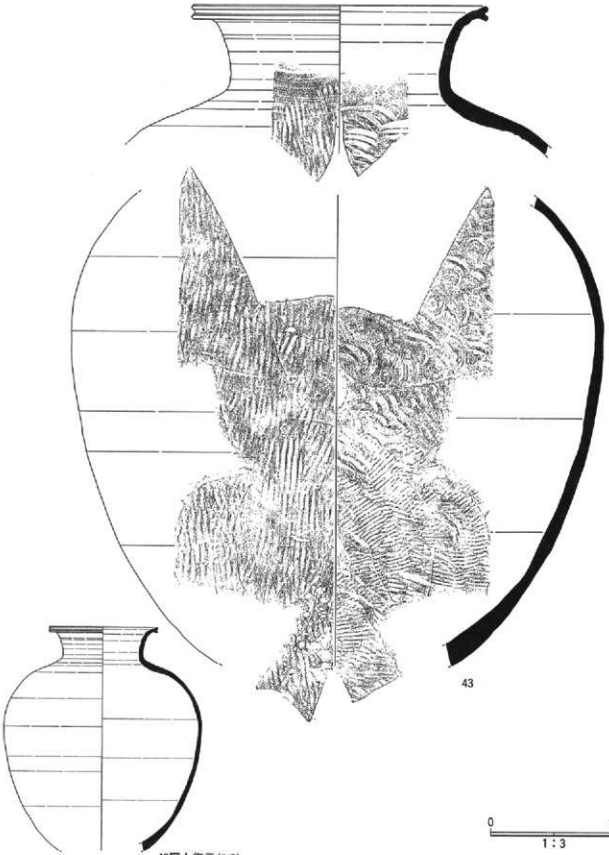
第15図　遺物実測図（1）



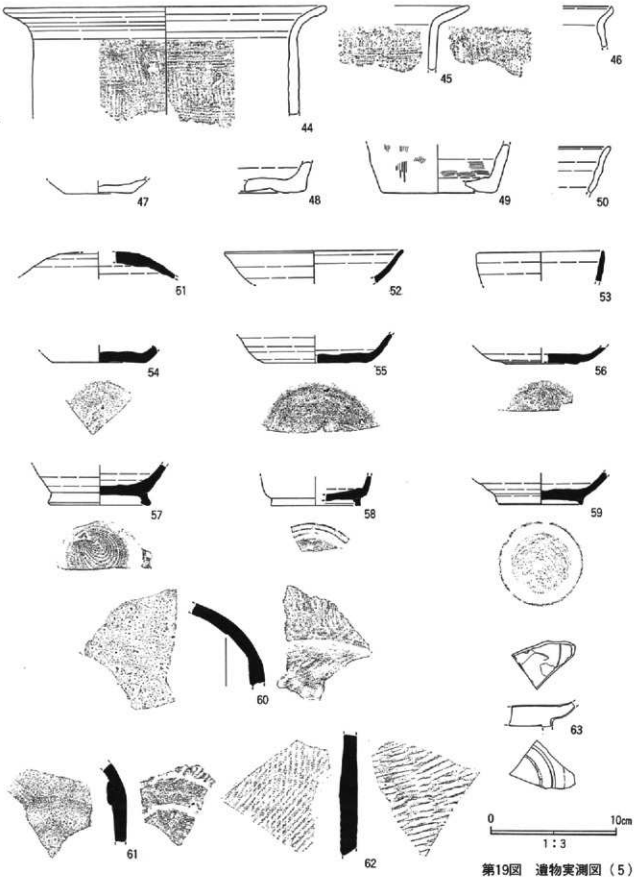
第16図　遺物実測図（2）



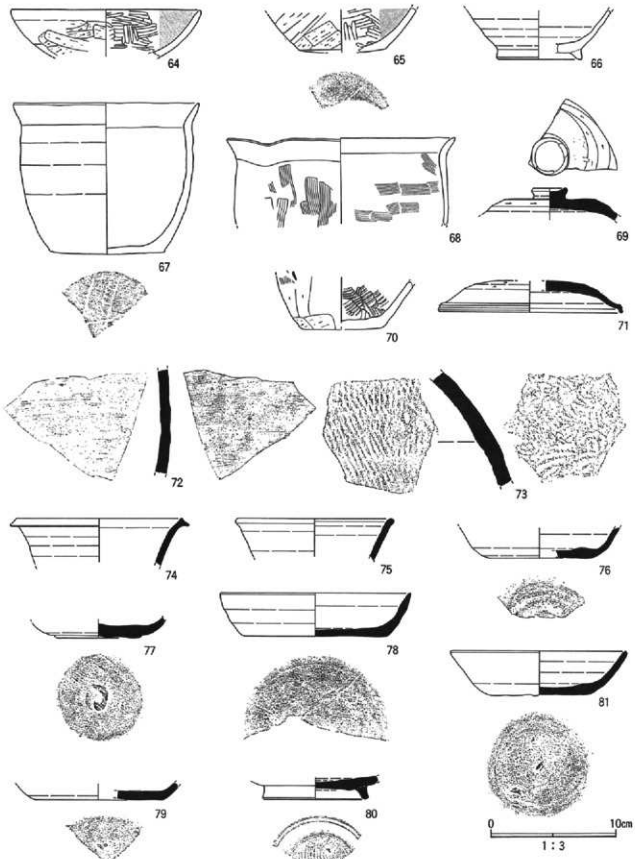
第17図　遺物実測図（3）



第18図　遺物実測図（４）



第19図　遺物実測図（5）



第20図　遺物実測図（6）

出土遺物観察表（1）

挿図番号	遺物番号	器種	器形	出土地点	計測値(cm) 口径	底径	器高	器厚	成形 外面	内面	底部切離	胎土	焼成	色調	備考
第15図	1	土師器	甕	ST365	102	76	75	5	ハケメ	ハケメ	木製痕	緻密	良	浅黄橙色	RP14
	2					(82)		5	ハケメ	ハケメ	木製痕	細砂質	良好	浅黄橙色	RP9、ST365南東、覆土(内面部)
	3				(146)	(43)	(243)	5	ロクロ ナデ	ロクロ	回転糸切	緻密 雲母含	良好	にぶい橙色	粘土紐り合わせ
	4				(130)			5				粗砂質	良	にぶい黄橙色	RP27、2～3m大の礫混入、RP12に類似
	5							6	ハケメ	ハケメ		粗砂質		にぶい黄橙色	RP12、ST365南東、粘土紐巻上げ痕有
	6					71		5				粗砂質	良	浅黄橙色	RP13、底部にこげ、煤付着、底部粘土貼り付痕有
	7		鉢		(141)			5	ロクロ	ロクロ		緻密	不良	灰白色	1/8残、少し歪んでいる 生焼
	8				(150)			7	ロクロ	ロクロ		細砂質	不良	灰白色	少し歪んでいる 生焼
	9	須恵器	坏			70		5	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転ヘラ切	細砂質	不良	浅黄橙色	RP7、ST365北東、底部都状圧痕、火焼 生焼
	10				(130)	74	29	4	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切ナデ	密	良	浅黄橙色	RP8、火焼（内外面）、ベルト上 生焼
	11				(150)	(90)	34	7	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ヘラ切 手持ヘラ削	粗砂質	不良	浅黄橙色	胎土・成形がRP8と類似
	12				(150)			4	ロクロ	ロクロ		粗砂質	良	灰白色	2～3mm大の礫混入
	13					(104)		7	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	密	不良	灰白色	生焼
	14				135	80	37	4	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 ナデ	粗砂質	不良	灰白色	RP13、火焼、器状痕有(底部) 胎土に2m大の礫混入 生焼
	15		蓋		186			7.5	ロクロ	ロクロ		細砂質	良好	にぶい黄橙色	内口径170
	16		壺					8	ロクロ カキメ	ハケメ		緻密	良好	暗青灰色	
第16図	17	土師器	坏	ST652	123	54	45	4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂質	良好	橙色	RP15、歪み有
	18				130	60	50	4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	密 細砂混	良	にぶい橙色	RP16、ロクロ・ナデ痕明瞭
	19				138	52	53	4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂質	良	橙色	RP17、若干の歪み有、口縁内部焦げ有
	20		皿			55		7	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細・粗砂混	良	明赤褐色	
	21					56		4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗砂質	良	橙色	ST652（F1）
	22				(250)			6	ロクロ	ロクロ ナデ		細砂質	良	浅黄橙色	ST652（F1）
	23				188			5	ロクロ ケズリ	ロクロ		細砂質	良	橙色	
	24				(240)			7	ロクロ	ロクロ		細・粗砂混	良好	橙色	RP34、体部内面にこげつき有
	25				(106)			5	ハケメ	ハケメ		緻密	良好	にぶい褐色	内・外面焦げ有
	26							6.5	ケズリ	ハケメ		粗砂質	良	浅黄橙色	RP18
	27				(252)			5	ロクロ	ロクロ		細砂質	良好	黄橙色	RP39
	28				(224)			7	ロクロ ケズリ	ロクロ		細砂質	良好	浅黄橙色	
第17図	29	須恵器	鉢	SD851	(260)			8	ヘラナデ	ロクロ				橙色	
	30		甕		(242)			6	ロクロ ナデ	ロクロ		緻密	良好	灰赤色	多少酸化、自然釉
	31		坏					5	ロクロ	ロクロ		細砂質	良好	黄灰色	
	32		坩	SD851	158	64	72	6	ケズリ ミガキ	ミガキ 黒色化	手持ちヘラ削	緻密 雲母含	良好	にぶい黄橙色	RP27、黒色土器、外面黒斑、SB4関連遺構出土
	33	土師器	坏		(156)	83	38	4	ケズリ	ミガキ 黒色化	手持ちヘラ削	緻密 粗砂混	良好	にぶい黄橙色	RP28、黒色土器、外面黒斑、SB4関連遺構出土
	34				(110)	60		4	ケズリ	ミガキ	手持ちヘラ削	密	良好	明赤褐色	RP26、SB4関連遺構出土
	35		甕	SK523				5.5	ロクロ ハケメ	ロクロ ハケメ		細砂質	良	暗青灰色	RP35、転不、SB4関連遺構出土
	36		壺	SD851	154	89	32	4	ロクロ ケズリ	ロクロ	回転ヘラ切 回転ヘラ削	緻密 粗砂混	良好	灰褐色	RP5、内底部転用硯、歪み有り、黒色内面中央部に墨痕(タナキ痕)、内面刷毛目、SB4関連遺構出土
	37		甕	SK523		(100)		11	ハケメ	ハケメ		密 細砂混	良	灰色	SB4関連遺構出土
	38	須恵器	坏	SD520	(160)			3	ロクロ	ロクロ		細砂質	良	灰色	SB4関連遺構出土
	39			EB87	(142)			4	ロクロ	ロクロ		密 細砂混	良	灰黄色	G－5、SB2出土
	40			SK523	140	90	37	4	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 ナデ	緻密	良好	オリーブ灰色	RP25、SB4関連遺構出土
	41		高台付坏	SD851	148	90	50	3.5	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	回転ヘラ切 ナデ	細砂質	良好	黄灰色	RP5、I－11、ふこみに墨跡・ナデ痕、歪み有、高台2/5残存、SB4関連遺構出土
	42			SD520	120	74	62	4	ロクロ	ロクロ		密 細砂混	良好	黄灰色	RP24、胎土が5に類似、SB4関連遺構出土
第18図	43		甕	SK548	234			8	ロクロ タタキ	ロクロ アテ		緻密 粗砂混	良好	黒褐色	体部最大径420mm（推定）、器高487mm、最大器厚18mm

出土遺物観察表（2）

調査区	遺物番号	器種	器形	出土地点	計測値(cm) 口径	底径	器高	器厚	成形 外面	内面	底部切離	胎土	焼成	色調	備考
第19図	44	土師器	甕	SK523	(254)			8	ロクロ ハケメ	ロクロ ハケメ		密 雲母・粗砂混	良好	黄橙色	SB4 間道遺構出土
	45				(284)			6	ロクロ ハケメ	ハケメ		粗砂混	良好	にぶい黄橙色	2mm大の雲母入、SB4 間道遺構出土
	46				(220)			4	ロクロ ハケメ	ロクロ ハケメ		細砂混	良	黄灰色	SB4 間道遺構出土
	47			SD123		(56)		6				細砂混	良	浅黄橙色	
	48			SD124				9			ヘラナデ	粗砂混	良	浅黄橙色	K－4、F1
	49					(92)		8	ハケメ	ハケメ		細砂混	良	灰黄褐色	外面こげ
	50		坏		(162)			4	ロクロ	ロクロ		細砂混	良	橙色	
	51	須恵器	蓋	SD123				7	回転ヘラ切 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細砂混	良	にぶい褐色	F－8
	52		坏		(140)				ロクロ	ロクロ		細砂混	良	灰黄色	
	53				(100)			4	ロクロ	ロクロ		細砂混	良	灰白色	
	54					(74)		6	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細砂混	良	灰色	底部外面ナデ
	55					(80)		4	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	密	良	灰白色	RP2、胎土に2mm大の雲母、G－6
	56					(59)		5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	緻密	良好	灰白色	RP3、G－6、粘土貼り合わせ
	57		高台付坏			80		5.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂混	良好	灰色	RP1、G－6、高台15mmのみ残存
	58					(70)		4	ロクロ	ロクロ		細砂混	良好	灰色	60+76
	59					66		4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗砂混	良	にぶい赤褐色	RP4、G－7、胎土に2～3mmの雲母入、酸化
	60		横瓶	SD124				10	ロクロ カキメ	ハケメ ロクロ ナデ		緻密	良	灰色	
	61							10	ロクロ	ロクロ		細砂混	良好	灰黄色	RP20、内面に指頭痕、粘土貼り付け順記入
	62		甕	SD123				12	タタキ	アテ		細砂混	良	褐灰色	
	63	青磁	碗	SD124				17	施釉	施釉		緻密	良好		RF19、龍泉系青磁、高台欠損、みこみにスタンプ
第20図	64	須恵器	坏	SD982	(75)			5.2	ケズリ	ミガキ 黒色化		緻密 雲母混	良好	灰白色	黒色土器、外面黒斑
	65			SK580		(70)		5	手持ちヘラ削	ミガキ 黒色化	手持ちヘラ削 木葉痕	緻密	良好	灰白色	RP23、黒色土器、外面煤薄から体部に墨痕有 丸底風
	66	土師器	高台付坏	SK912		(68)		3.5	ロクロ ナデ	ロクロ		細砂混	良	浅黄橙色	
	67		甕		(147)	(90)	120	5			木葉痕	細砂混	良	黄橙色	RP32
	68			SK729	(180)			4	ハケメ	ハケメ		細砂混	良好	にぶい黄橙色	粘土紐積み上げ有
	69	須恵器	壺	SK580		(72)		7	ロクロ ナデ 回転ヘラ削	ロクロ ナデ	回転ヘラ切 回転ヘラ削	緻密 細砂混	不良	灰白色	RP22、天井部つまみ痕に墨痕有（「匠」または「所」の可能性）生焼
	70	土師器	甕	I－13		63		6	ケズリ ハケメ	ハケメ	手持ち回転ヘラ切	粗砂混	良好	橙色	RP31、I・J－14上
	71	須恵器	壺	SE276				7	ロクロ ケズリ	ロクロ	回転ヘラ切 回転ヘラ削	細砂混	良	灰色	頸定口径（144）
	72		甕	SD982				7	ロクロ ハケメ	ロクロ ハケメ		緻密 雲母混	良好	褐灰色（外面）	RP30、I－14
	73			SD312				12	タタキ	アテ		緻密 細砂混	良	黒色	J－8・9、外面銀状痕有
	74			X、O	(131)			5	ロクロ	ロクロ		緻密 細砂混	良好	暗灰色	
	75			I－14	(120)			4.5	ロクロ	ロクロ		細砂混	良	灰黄褐色	
	76		坏	SD982		(80)		4	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 ナデ	細砂混	良好	黄灰色	胎土に2mm大の雲母入
	77	須恵器		K－7		68		(5)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細砂痕	不良	灰白色	RP33、板状圧痕（底部）、RP11に胎土細粒 生焼
	78			SD982	(150)	(116)	34	5.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 ヘラナデ	細砂痕	良	灰黄色	RP29、2～3mm大の雲母入
	79			SK729		(110)		5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	粗砂混	不良	灰白色	RP11 生焼
	80		高台付坏	SK580		(84)			ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂混	良	灰オリーブ色	
	81		坏		139	80	34.5	4.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 ナデ	細砂混	良	浅黄橙色	RP21

Ⅵ　まとめ

今回の調査は、救護施設「山形県立みやま荘」改築整備事業に伴う緊急発掘調査である。発掘調査では、四ツ塚遺跡推定面積約70,000㎡のうち、昨年度が3,900㎡、今年度は3,600㎡が調査対象となった。

四ツ塚遺跡は山形盆地の北西部、河北町吉田に所在し、出羽丘陵の山麓一帯の段丘を形成する法師川などの開析扇状地群と寒河江川扇状地との境に所在する、奈良・平安時代と中世の複合遺跡である。

今年度の四ツ塚遺跡第２次発掘調査で検出された主な遺構は、竪穴住居跡４棟、掘立柱建物跡３棟、井戸跡１基、溝跡10条以上、道路状遺構などである。さらに大小の土壙・ピット・風倒木を加え、登録した遺構は1,000基を越える。出土した遺物は、土師器、須恵器、陶磁器など、整理箱にして10箱検出された。遺構・遺物は、調査区ほぼ全体に分布する。

昨年度の調査区と今年度の調査区の接点である東側の部分は、改築整備事業または、それ以前に削平され、昨年度の調査区と今年度の調査区とは削平部の川を隔てて繋がることになった。また調査区内においても、解体された建物の基礎部分が遺構検出面下まで入る部分が多々あり、特に調査区南側の部分については、遺構が隔絶する部分が分布し、構成が把握できない部分があった。

調査区の南東隅に、外周を溝で囲まれた掘立柱建物跡を中心とする遺構が検出された。外周の溝については、建物に付随するものか、集落を囲む溝なのかは検討を残すところであるが、出土した土器の観察結果に基づいて奈良時代に溯る遺構であることが比定できる。調査区の西側では、奈良時代と平安時代の所産であると考えられる竪穴住居跡が検出された。

さらに、調査区中央の掘立柱建物跡ＳＢ３とその西側のＳＢ２、ＳＥ276は中世に造られたり、機能した建物と比定できる。

出土遺物では、ＳＴ365・ＳＢ４周辺遺構（ＳＤ982・ＳＤ520・ＳＤ851・ＳＫ523等）・ＳＫ580・ＳＫ729から出土した土器は同じ河北町に所在する不動木遺跡の出土土器の中に散見され、実年代では８世紀半ば以降、奈良時代の後半の土器群として捉えられる。また、「山形県の古代土器編年」（阿部：1998）によると８世紀第３・４四半期を溯る土器と考えられる。また、底部回転糸切りで底形が小さく器高が高い９世紀第４四半期と考えられる土師器（「赤焼土器」）も出土している。さらに、ＳＤ124からは、15世紀代と思われる青磁も出土している。

これらのことから、四ツ塚遺跡は８世紀半ばから９世紀末、さらに中世まで断続的に営まれた集落跡であることが推測される。

今年度の調査で昨年度の第１次調査の調査区とが繋がり、四ツ塚の遺跡推定面積70,000㎡のうち7,500㎡が発掘調査されたことになる（第21図）。

遺構に関しては、昨年度検出された道路状遺構の延長と思われる遺構が今年度の調査区においても検出された。また、中世の区画溝と考えられたＳＤ1610とＳＤ1603の延長部分と考えられる溝跡ＳＤ312やＳＤ402も検出されている。

まとめ

道路状遺構に関しては、昨年度ＳＤ555とＳＤ1002の両溝に挟まれ調査区中央で検出された道路跡が、今年度はＳＤ959とＳＤ124に挟まれ調査区北東部分で検出された。昨年度の道路跡の溝幅や方向もほぼ一致し、その延長部分と捉えることができる。しかし時代判別について昨年度と意見を異にした。昨年度と今年度の調査区の境に削平部分が横たわり、推定の域を越えない部分もある。また、昨年度調査区西側で検出されたＳＢ1616の延長部分はその削平部分により、未検出を余儀なくされている。

今後は、同時期と考えられる周辺遺跡の分析と考察をさらに進めていかなければならない。

(参考文献)

佐藤 庄一　：「山形県における平安時代の土器様相(予察)」庄内考古学16号 1979

阿部 明彦　：「山形県余目町上台遺跡の竪穴住居跡と出土土器について」
庄内考古学16号 1979年

渋谷 孝雄他　：「境田Ｃ′・Ｄ遺跡発掘報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第76集 1984

長橋 至他　：「不動木遺跡発掘報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第100集 1986

佐藤 正俊他　：「遠磨寺遺跡発掘報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第104集 1986

阿部 明彦・水戸 弘美　：「山形県の古代土器編年」第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料 1998

植松 暁彦他　：「塗山長表遺跡発掘報告書」
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第58集 1999

高橋 敏他　：「四ツ塚遺跡発掘報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第70集 1999

「河北町史上巻」

「西村山郡大堰土地改良区史」1992

「山形県の地名」『日本歴史地名体系６』平凡社1990

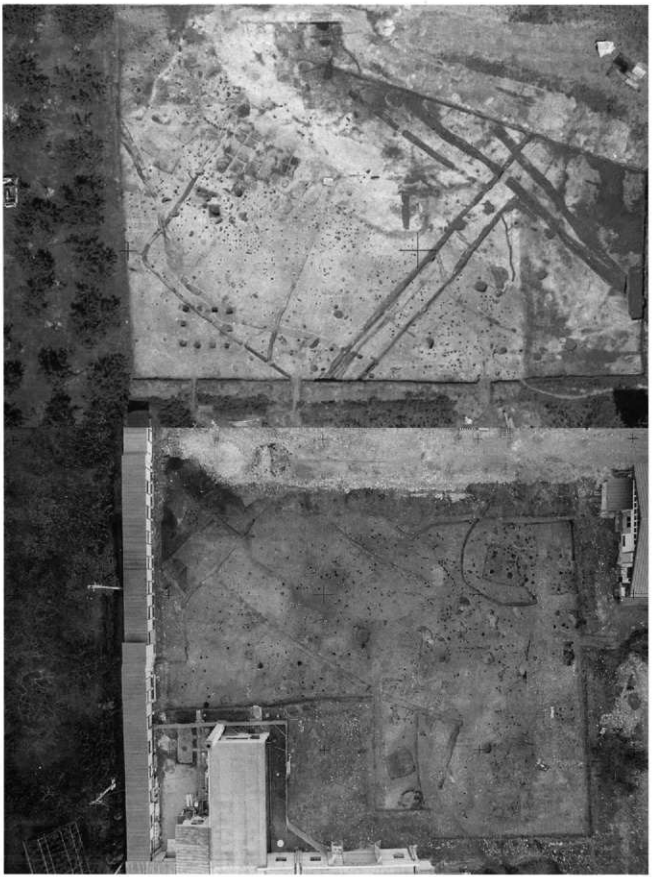
報 告 書 抄 録

ふ り が な	よつづかいせきだい２じはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	四ツ塚遺跡第２次発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第74集
編 著 者 名	岡部　博　豊野潤子
編 集 機 関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　TEL 023-672-5301
発 行 年 月 日	2000年３月31日

所収遺跡名（よつづかいせき）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
四ツ塚遺跡（よつづかいせき）	山形県（やまがたけん） 西村山郡（にしむらやまぐん） 河北町（かほくまち） 大字吉田（おおあざよしだ） 字馬場（あざばば） 164他	6321	481	38度 26分 43秒	140度 18分 49秒	19990830 ～ 19991105	3,600	山形県立救護施設みやま荘改築整備事業

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	奈　良 平安時代	竪穴住居跡　2 掘立柱建物跡　1 溝跡　5 土壙　4	須恵器（坏・甕・甑） 土師器（蓋・坏・高台付坏・甕・壺・横瓶）	掘立柱建物跡の周囲を円形に溝が廻っているのが確認された。 その周辺の土壙や溝跡から、遺物が多く出土した。
集落跡	中　世	掘立柱建物跡　2 溝跡　6 井戸跡　1 道路状遺構　1	青磁（碗）	掘立柱建物跡に付随する、規則性をもった溝跡が確認された。 また道路状遺構も見つかった。 （総出土箱数：10）

図　　版



第 1 次調査区（上）・第 2 次調査区（下）・合成空中写真（左が北）

図版 2

面整理

遺構検出

遺構精査

調査説明会

調査区東側撹乱域確認調査（西から）

基本層序第４図ａ－ａ′（東から）

基本層序第４図ｂ－ｂ′（南から）

基本層序第４図ｃ－ｃ′（西から）

ＳＴ365竪穴住居跡精査状況（南から）

ＳＴ365断面第５図ａ－ａ′（南から）

ＳＴ365断面第５図ｂ－ｂ′（西から）

ＳＴ365竪穴住居跡完掘状況（南から）

ST365南東隅遺物出土状況（南から）

ＲＰ７（９）出土状況（南から）

ＲＰ９（２）出土状況（南から）

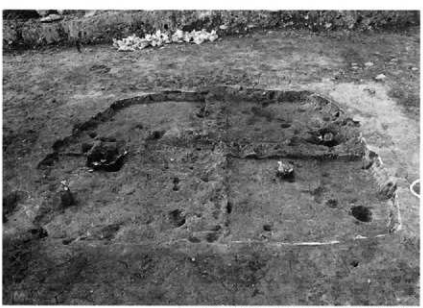
ＲＰ10(6)・ＲＰ11(1)（南から）

ＲＰ12(5)・ＲＰ13(14)・ＲＰ14 (11)

図版 4

ＳＴ652断面第６図ａ－ａ′（南から）

ＳＴ652断面第６図ｂ－ｂ′（西から）



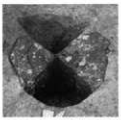
ＳＴ652竪穴住居跡遺物出土状況（東から）

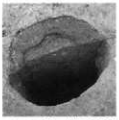
ＲＰ15(17)出土状況（東から）

ＲＰ16(18)出土状況（東から）

ＲＰ17(19)出土状況（北西から）

ＲＰ18(26)・22・24出土状況（南西から）


E B142（北東から）


E B171（北から）

E B173（北西から）

E B250（北東から）

E B143（北東から）

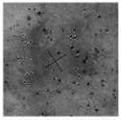
E B168（北から）

E B323（北西から）

E B324（東から）

E B144（西から）

E B252（西から）


S B 3空中写真（上が北）

E B164（東から）

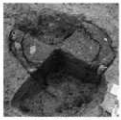
E B263（南東から）

E B264（南東から）

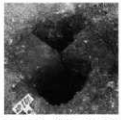
E B155（南から）

E B163（南東から）

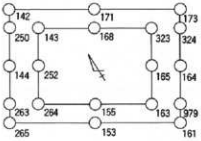
E B979（東から）


E B265（南東から）

E B153（南から）

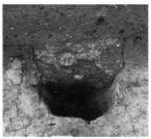

E B161（南西から）

S B 3掘立柱建物跡第7図（南西から）

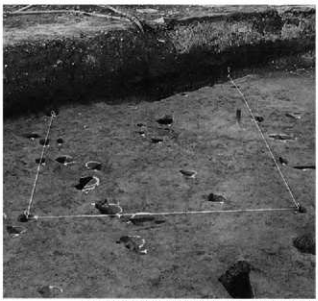


S B 3模式図

図版 6

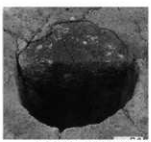


ＥＢ89（南西から）



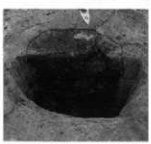
ＳＢ２掘立柱建物跡第８図（南東から）

ＥＢ85（北東から）

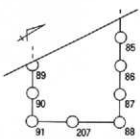


ＥＢ90（南西から）

ＥＢ86（北東から）

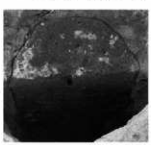


ＥＢ91（南西から）



ＳＢ２模式図

ＥＢ88（北東から）



ＥＢ87（北東から）

ＳＤ851－ＲＰ５(41)出土状況（南西から）

ＳＤ851－ＲＰ６(36)出土状況（南から）

ＳＤ520－ＲＰ24(42)出土状況（東から）

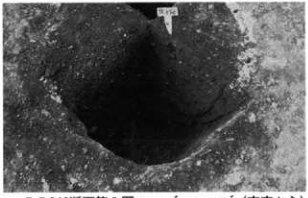
ＳＤ851－ＲＰ27(32)・ＲＰ28(33)出土状況（東から）

ＳＤ982遺物出土状況（北西から）

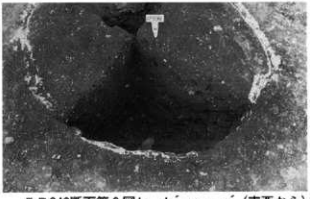
ＳＢ４掘立柱建物跡・ＳＤ520溝跡他完掘状況（北から）

ＥＢ865断面第９図ａ－ａ´・ｄ－ｄ´（南西から）

ＥＢ525断面第９図ｂ－ｂ´・ｄ－ｄ´（南東から）



ＥＢ848断面第９図ａ－ａ´・ｃ－ｃ´（南東から）



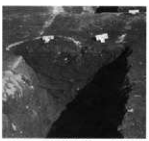
ＥＢ846断面第９図ｂ－ｂ´・ｃ－ｃ´（南西から）

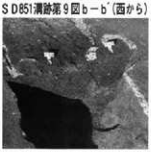
図版 8

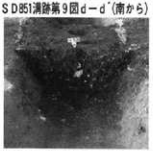
ＳＤ851溝跡第９図ｂ－ｂ′（西から）

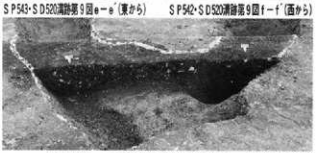
ＳＤ851溝跡第９図ｄ－ｄ′（南から）

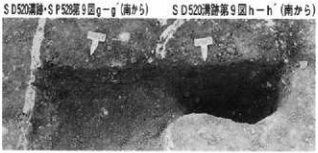
ＳＰ543・ＳＤ520溝跡第９図ｅ－ｅ′（東から）


ＳＰ542・ＳＤ520溝跡第９図ｆ－ｆ′（西から）

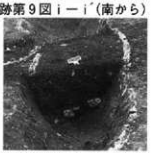

ＳＤ520溝跡・ＳＰ528第９図ｇ－ｇ′（南から）

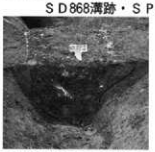

ＳＤ520溝跡第９図ｈ－ｈ′（南から）


ＳＤ520・ＳＤ894溝跡第９図ｉ－ｉ′（南から）

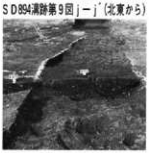

ＳＤ868溝跡・ＳＰ869第９図ｋ－ｋ′（西から）

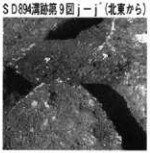
ＳＤ894溝跡第９図ｊ－ｊ′（北東から）


ＳＤ894溝跡第９図ｊ－ｊ′（北東から）

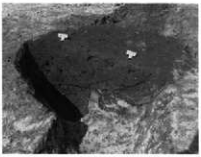

ＳＤ982溝跡第９図ｍ－ｍ′（北から）

ＳＤ982溝跡第９図ｎ－ｎ′（北から）


ＳＰ455・ＳＤ312溝跡第９図ｑ－ｑ′（南から）


ＳＤ402・ＳＤ401溝跡第10図ｒ－ｒ′（南から）

調査区全域完掘状況（南東から）


SP181・SD124溝跡第10図q－q′（南東から）

SD124溝跡第10図b－b′（西から）

SD124・SD123溝跡第10図c－c′（西から）

SD123溝跡・SP136第10図d－d′（南西から）

SP122・SD123溝跡第10図e－e′（南西から）

SD123溝跡第10図f－f′（南西から）

SD123溝跡第10図g－g′（南から）

SD123・SD362溝跡第10図h－h′（南から）

SD123溝跡・SK368第10図i－i′（北から）

SD123溝跡・SX616第10図j－j′（西から）

SD123溝跡第10図k－k′（東から）

SD362溝跡第10図ℓ－ℓ′（東から）

SD362溝跡第10図m－m′（東から）

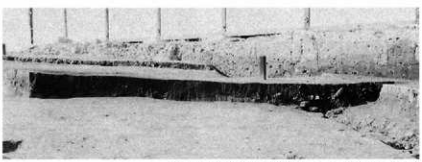
SD362溝跡第10図n－n′（東から）

SD312溝跡第10図o－o′（南西から）

図版10

道路状遺構 左ＳＤ124・右ＳＤ959（南東から）

ＳＤ123溝跡完掘状況（北東から）



道路状遺構断面第12図ａ－ａ´（南東から）

道路状遺構断面第12図ｂ－ｂ´（南東から）

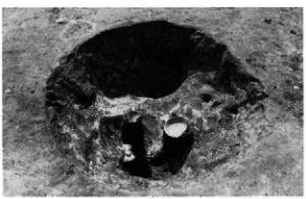
ＳＫ548土壙土層断面（南から）

ＳＫ548土壙遺物出土状況（手前南）

ＳＫ523土壙土層断面（南西から）

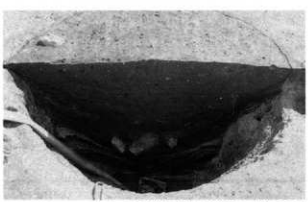
ＳＫ523土壙遺物出土状況（北東から）

ＳＫ580土壙土層断面（南から）


ＳＫ580土壙遺物出土状況（北から）

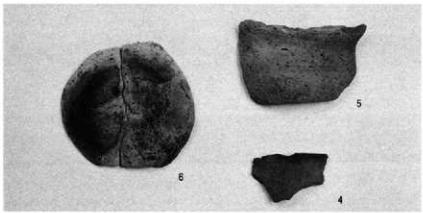
ＳＫ729土壙土層断面（南から）

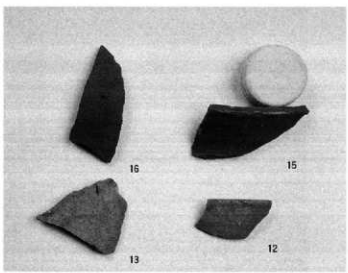
ＳＫ729土壙遺物出土完掘状況（南から）

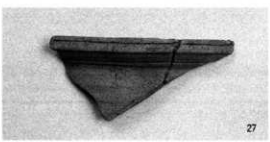

ＳＥ276井戸跡土層断面（北から）

ＳＥ276井戸跡完掘状況（北から）

図版12







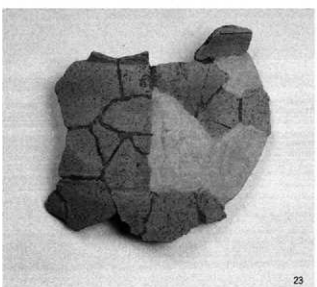
17

18

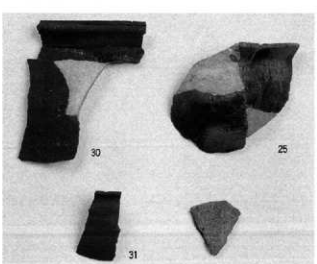
19

24

26


23

28


30
25
31

29

図版14

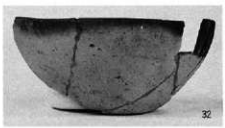
42

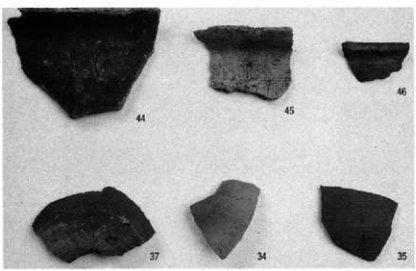
36

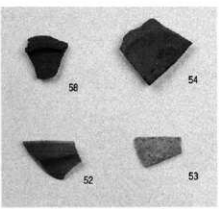
33

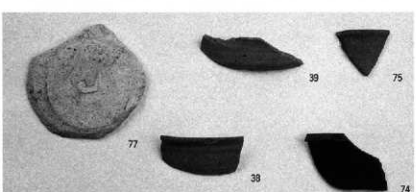
40

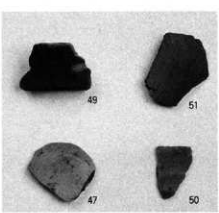
41

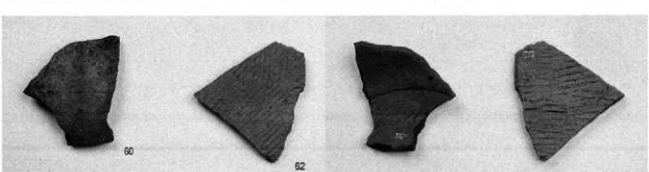

32

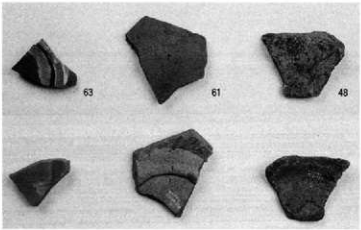

44
45
46
37
34
35

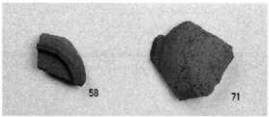

56
54
52
53


39
75
77
38
74

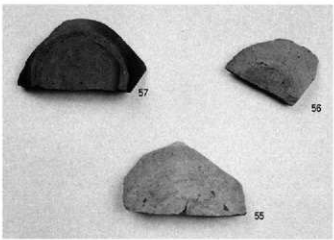

49
51
47
50


60
62

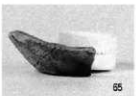

63
61
48

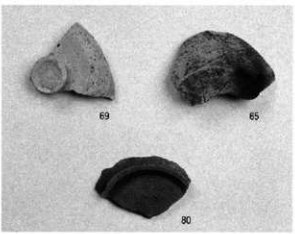

58
71

81


57
56
55

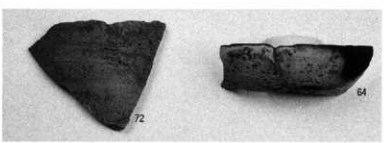
69

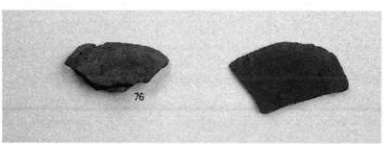

65

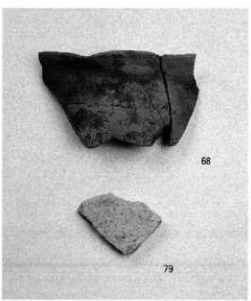

69
65
80

59

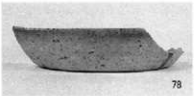
66


72
64


76

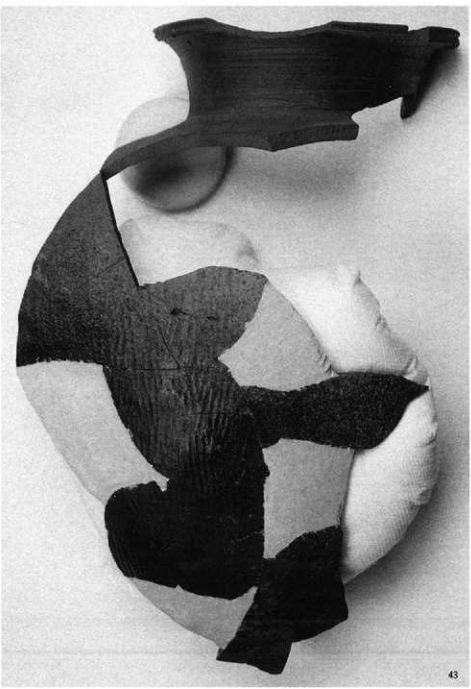

68
79

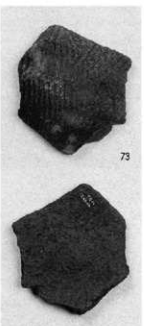
図版16


78

70

67


43


73

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第74集

四ツ塚遺跡第２次発掘調査報告書

2000年３月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999－3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023－672－5301
印刷　山形印刷株式会社